日本のおとぎ話

一年生

学年別・幼年文庫

徳永寿美子 編著
日本のおとぎ話
—解説と読書指導つき—
一年生

偕成社発行

学年別幼年文庫

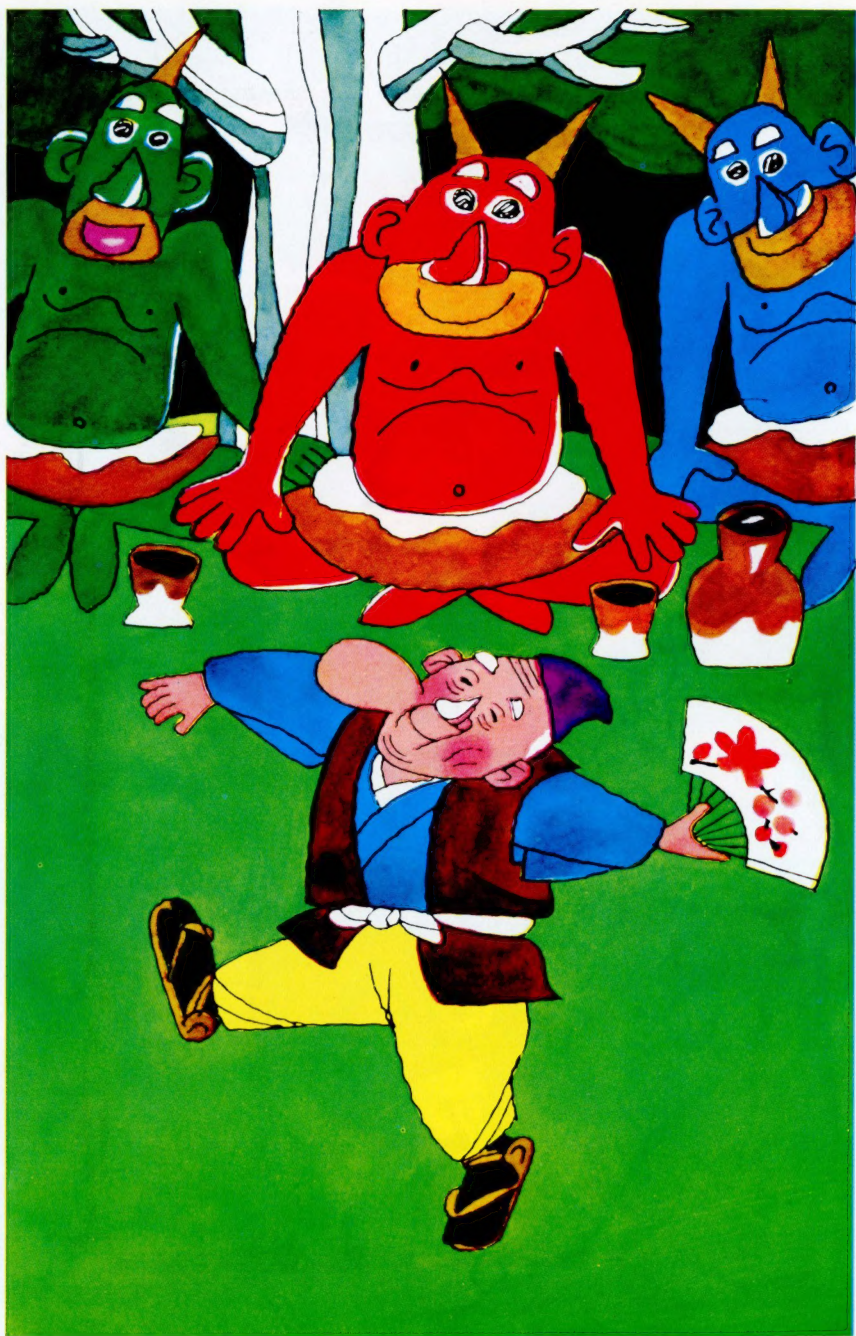
刊行のことば

低学年の児童にふさわしい学年別の本、情操教育ともなり、知的教育にも役立つ本――こういう要望にこたえて生れたのが、この文庫です。

　企画は幼年期に一度はぜひ読ませたいもののみを選び、同一書名のものが一年から三年までの三冊に分れて居り、その興味と理解力に応じて各々異った内容の話を各学年に収めました。取材に当っては、美しい人格の形成、良識の涵養を旨とし、本文はもとより挿絵にも細心の注意を払い、四色刷十二頁を配しました。また巻末には懇切な解説と読書指導を付し、父兄及び先生方のご参考に供しました。

けちんぼうの　おとこは、　おかずを　かわずに、　うなぎを　やく　においで、　べんとうを　たべました。

かにに　おおけがを　させた、　わるい　さるは、　はちや　うすたちの　ために、　つかまえられました。

かには、さるの　くびを　ちょんぎろうと　おもいましたが、あやまったので　ゆるして　やりました。

おどりの　すきな　おじいさんは、こわい　おにの　まえも　わすれて、ゆかいに　おどりだしました。

みなさんへ

この『おとぎばなし』は、おもしろい　おはなしばかりです。
ねずみが　すもうを　とったり、あかい　かきが、きの　うえから　おりて　きたり　します。
こう　いう　おはなしを、むかしの　こどもは、おじいさんやおばあさんに　はなして　もらって　いました。
でも、みなさんは、この　ほんを　およみに　なれば、ほんがいろいろな　おはなしを　はなして　くれます。

とくなが　すみこ

もくじ

装幀　沢田重隆
カバー絵
口絵・さし絵　鈴木寿雄

日本のおとぎ話

一年生

徳永寿美子

けちんぼと　けちんぼ

一

むかし、たいそう　けちんぼの　ひとが　いました。

ある　ひ、

「なんにも　おかずが　なくっても、ごはんだけで、おいしく　たべる　くふ

うは　ないもんかなあ。」
と、しきりに　かんがえて
いました。
「あ、ある。いい　ことが
ある。」
その　ひとは、
ごはんだけの
おべんとうを
もって、うなぎやの
そばへ　いきました。

うなぎやの　みせから　は、うなぎを　やく、

いい　においが、ぷんぷん　におって　きました。
よだれが　でそうな、おいしい　においです。
けちんぼの　ひとは、みちばたの　きの　したに、
こしを　おろして、
「ああ、いい　においだ。おいしい　おいしい。」
そう　いいながら、ごはんを　たべて　いました。

二

するど、うなぎやの　しゅじんが　でて　きました。この　ひとも、けちんぼで　なだかい　ひとです。

けちんぼの　しゅじんは、　けちんぼの　ひとの　まえに　きて、
「どうぞ、　おかずだいを　はらって　ください。　一えんです。」
と、　いいました。
「えっ。　わたしは、　どこからも　おかずなんか　かいませんよ。」
「でも、　いま、　うなぎの　においを　おかずに　して、　おいしい
おいしいと、　ごはんを　たべて　いたでは　ありませんか。」
「ふうん。」
と、　うなるように　いって、　けちんぼの　ひとは、　しばらく
かんがえて　いましたが、　きゅうに　いきおいよく、
「じゃ、　はらいましょう。」

と、ふところから　がまぐちを　だしました。

けちんぼの　しゅじんは、にこにこ　して、みて　いました。

けちんぼの　ひとは、がまぐちから　十せんだまを、十　とりだして、しゅじんの　まえで、じゃらじゃら　おとを　させました。

「ね、きこえたでしょう。」

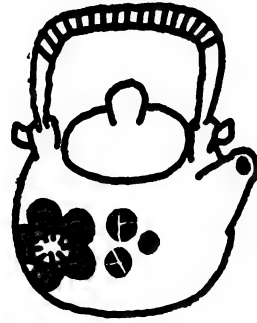
「そりゃあ　きこえましたよ。みみが　あるんだもの。」

「よろしい。」

けちんぼの　ひとは、おかねを　がまぐちに　しまって　しまいました。

「あれ、あれ、しまっちゃあ　だめですよ。はらって　くださいよ。」
「いま、はらったじゃ　ありませんか。」
「ええっ。」
「かいだ　においの　だいきんですから、わたしは、おかねの　おとで、おはらい　したんですよ。あっは、は、は。」
けちんぼの　ひとは、ゆかいそうに　わらって、いって　しまいました。

ふじづるの　こぶ

一

ずっと　むかしの　ことです。

おひゃくしょうの　おじいさんが、かぜを　ひきました。からだが、かっかと　あつく　なりました。ねつが　でたので　ありましょう。

でも、やまおくの　むらです。おいしゃさまなんぞ　ありません。

むらの　ひとたちは、なんでも　こまる　ことは、おてらの　おしょうさまに　そうだん　する　ことに　なって　います。

おじいさんは、ふらふら　しながら、おてらへ　いきました。

「おしょうさま、おしょうさま。わしは、かぜを　ひきました。なんか、いい　くすりは　ありませんかね。」

おしょうさんは、とても　えらい　ひとです。じなんか、どんな　むずかしい　じでも　よめますが、かぜの　くすりは　しりませんでした。

けれども、せっかく　ちからに　されて　いるのに、ことわるのも　わるいと　おもって、いいました。

「うん、ふじづるの　こぶを、せんじて　のめば、なおる。」
「どんな　ふうに　やるんですか。」
「こぶを　けずって、どびんに

いれて、ごとごと　にだして、しるを　のむのさ。」
と、でたらめに　いいました。

おひゃくしょうは　よろこんで、やまへ　いって、さがしました。

はるでしたから、ふじは、むらさきいろの　きれいな　はながさいて　いました。

なるほど、ふじの　ふとい　つるに、ごつんと　ふくれて　いる　こぶが　あります。

かまで、けずりとって　かえりました。にだして　のむと、ふしぎ　ふしぎ。かぜは、けろりと　なおりました。

「さすがは、おしょうさんだ。えらいもんだなあ。」
おじいさんは、すっかり　かんしん　しました。
一つきばかり　たった　ころ、おじいさんは、めが　わるく
なりました。
なんだか　ぼやっと　して、ものが　よく　みえません。
おじいさんは、せっせと　おてらへ　いきました。
「おしょうさま、おしょうさま。かぜは、ころっと　なおりました。こんどは　めです。めの　くすりを　おたのみ　もうします。」
「ふうん、めか。めなら、ふじづるの　こぶを、にだして　のめば、なおる。」

おしょうさんは、　ほんを　よんで　いて　むちゅうだったので、　また、　おなじ　ことを　いいました。

はてな、　かぜの　くすりと　めの　くすりが、　おんなじもんとは　ふしぎだと、　おじいさんは　くびを　かしげました。

それでも、　また、　やまの　おくの　おくまで　いって、　やっと、　ふじづるの　こぶを、　みつけて　きました。　にだして、　しるを　のみました。

ふしぎです。　めは、　けろりと　なおりました。

「すごいなあ、　おしょうさまは。　おそれいったわい。」

おじいさんは、　すっかり　かんしん　して　しまいました。

二

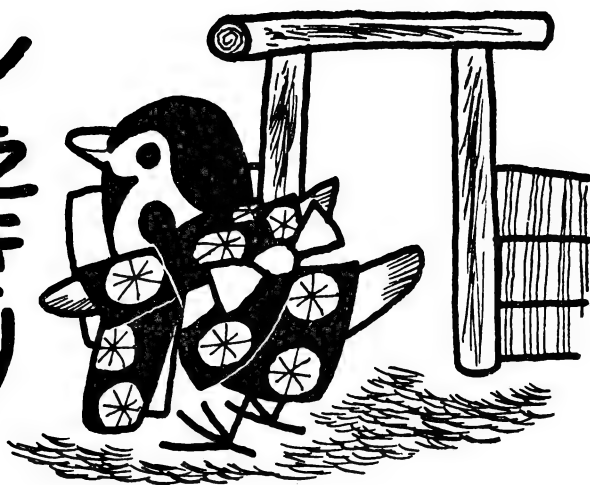
それから、十(とお)かばかり　たった　ときです。
おじいさんの　だいじな　うまが、いなく　なりました。
おひゃくしょうですから、うまに　にげられては、たいへんです。しごとが　できなく　なります。
おじいさんは、きりっと　はちまきを　しめて、いきを　きらしながら、おてらへ　かけこみました。
「おしょうさま、おしょうさま。こんどは　うまです。だいじなうまが、どこかへ　にげだしました。ど、どう　したら　よいで

しょう。」
おしょうさんは、じを　かいて　いたので、かんがえるのが
めんどうでした。
「ふじづるの　こぶを、にだして　のめば、みつかる。」
「へえっ。」
さすがに　おじいさんも、ふしぎに　おもいました。
「ちいっと　へんだぞ。だが、おしょうさまの　おっしゃる　こ
とだ。やって　みよう。」
おじいさんは、やまおくへ　とんで　いきました。
なかなか、ふじづるの　こぶが　みつかりません。

だんだん、おくへ　おくへと、はいって　いきました。
すると、むこうの　たにがわの　ほうで、ひひん、ひひんと、うまの　いななく　こえが　しました。
「はてな。なんだか　ききおぼえの　ある　こえだぞ。」
おじいさんは、ほそみちを　がさがさと、たにの　ほうへ、おりて　いって　みました。
一ぴきの　うまが、みずを　のんだり、くさを　たべたり　して　いました。にげだした　おじいさんの　うまでした。
「なるほど、えらい　おしょうさまだなあ。」
おじいさんは、かんしん　しながら、うまを　ひいて、うれし

そうに　かえって
いきました。

したきりすずめ

一

むかし、さびしい　いなかに、おじいさんと　おばあさんが、すんで　いました。

おじいさんは、ある　とき、やまへ　しばかりに　いった　かえりに、けがを　した　こすずめを、ひろって　きました。

まいにち、しんせつに、そだてて

やったので、こすずめは、すっかり、おじいさんに　なつきました。おじいさんの　あとばかり、ついて　まわるように　なりました。
おじいさんも、かわいくて　かわいくて　たまりません。だいじに　して　くらして　いました。
ある　ひ、おじいさんが、しばかりに　いって、かえって　みると、すずめが　いません。

「おばあさん、おばあさん。こすずめを　しらないかい。」

よばれて、おばあさんが　やって　きました。

「きょう、わたしがね、せんたくものに　つけようと、のりを　こしらえて　おいたら、あいつが　なめて　しまったのさ。くやしいから、はさみで　したを　ちょんぎって　やったら、にげて　いったよ。」

「えっ、なんて　かわいそうな　ことを　したんだい。よくよく、おなかが　すいてたんだろうに。」

おじいさんは、ちからを　おとしました。

おじいさんは、すずめが　かわいそうなので、つえを　ついて

さがしに　でかけました。
のはらを　こえて、やまを　こえて、
したきり　すずめ、おやどは　どこだ。
ちゅう　ちゅう。
したきり　すずめ、おやどは　どこだ。
ちゅう　ちゅう。
と、よび　よび、さがしまわりました。
いっても　いっても、みつかりません。
たにがわの　一ぽんばしを　わたって　いくと、ひろい　たけ
やぶが　ありました。

したきり　すずめ、おやどは　どこだ。
ちゅう　ちゅう。
と、よびながら　はいって　いきますと、
したきり　すずめの　おやどは　ここよ。
ちゅう　ちゅう　ちゅう。
かわいい　こえで、へんじを
しながら、こすずめが　たけ
やぶの　おくから　とびだして
きて、おじいさんに　とびつきま
した。

「おじいさん、よく　いらっしゃいました。どうぞ、おうちへ
きて　ください。」

おじいさんは、こすずめに　あえたのが　うれしくて、なみだを　ふき　ふき、ついて　いきました。

　すずめの　おうちは、きれいな　おうちでした。

　こすずめの　おとうさんや　おかあさんや、みんなが　でて　きて、おざしきに　つれてって　くれました。

ごちそうを　だしたり、おどりを
おどったり、うたを　うたったり、
それは　それは、にぎやかでした。
「ありがとう。ゆっくり　あそばせて
もらいました。あんまり　おそく
なるから、もう　かえります。」
おじいさんが、たとうと　する
と、こすずめの　おとうさんが
いいました。
「では、おみやげに　つづらを　あげます。おもいのと、かるい

のと、どっちでも　おもち　ください。」
「ごちそうに　なった　うえに、おみやげを　もらうなんて　わるいね。かるいのを　ください。」
おじいさんは、かるい　つづらを　しょって、にこにこ　かえって　いきました。

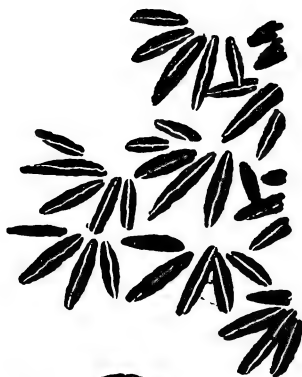
二

おじいさんは、うちに　かえって、つづらを　あけて　みると、びっくり

しました。
なかには、きんや
ぎんや、にしきの、
いろいろな　たから
ものが、いっぱい

つまって　いました。
おじいさんは、おばあさんに、すずめの　おうちの　ことを、いろいろと　はなしてから、
「おもい　つづらと、かるい　つづらを　だされたからね、かるい　ほうを　もらって　きたんだよ。それなのに、こんなに　いい　ものが　はいって　いて、きのどく　しちゃったなあ。」
「まあ、へんな　おじいさん。おもいのを　もらえば、もっと　たくさん　はいって　いたのにさ。わたし、これから、おもい　ほうのを、もらいに　いって　きますわ。」
おじいさんが　とめるのも　きかないで、おばあさんは　いっ

て　しまいました。
おばあさんは　かけあしで、たけやぶに　いきました。
したきり　すずめ、おやどは　どこじゃ。
ちゅう　ちゅう。
と、おおきな　こえで　よんで　いると、
したきり　すずめの　おやどは　ここだ。
ちゅう　ちゅう。
おくの　ほうから、こすずめが　でて　きました。そして、き
れいな　おうちへ　つれて　いきました。
おざしきに　とおして、ごちそうを　だそうと　すると、おば

あさんは、
やさしそう
な　こえで、
「わたしは、
ごちそうは　いら
ないよ。おどりも、うたも、いら
ないよ。おまえの　げんきな　か
おを　みたから、もう　これ
で　いいんだよ。おみやげを
もらって　かえります。」

こすずめは　すまして、
「あら、　まあ、　もう　おかえり。　じゃあ、　おみやげの
つづらを　あげましょう。」
「わたしは、　おもい　ほうを、　もらいますよ。」
「はい　はい、　どうぞ。」
だして　もらった　おもい　つづらを、　おばあさんは、　どっこいしょと　しょいました。
おもいので、　こしを　まげ、　つえを　ついて、　えっさ　えっさ

と　あるいて　いきました。
しばらく　いくと、おもくて　おもくて、こしが　おれそうに
なりました。
「ありがたい、ありがたい。こんなに　おもいのが、みんな、き
んや　ぎんや　おたからものだ。ちょっと　やすんで、なかを
みて　みよう。」
おばあさんは、みちばたに　つづらを　おろして、あせを　ふ
きました。
そして、にこにこ　しながら、ふたを　あけました。
わっと、おばあさんは　さけびました。

なかから、おおにゅうどうや、一つめこぞうや、あかおにや、あおおにや、へびや、むかでが、いっぺんに　でて　きて、おばあさんに　とびかかろうと　しました。
「たすけてえ、たすけてえ。」
と、おばあさんは、むちゅうで　にげて　にげて、やっと　うちへ　にげこみました。
「どう　したい、おばあさん。」
おじいさんは　びっくり　しました。
そして、おばあさんから　わけを　きくと、
「おまえは、やさしい　こころが　ちっとも　ない　おばあさん

だ。おまけに、ひどく　よくが　ふかい。それで、そんな　めに
あったんだよ。」
「ええ、こんどは　じぶんの　わるい　ことが、よく　わかりま
した。」
おばあさんは、しょんぼりと　いいました。
それからは、ほんとに　やさしい、いい　おばあさんに　なり
ました。

おばあさんは、つづらを　ちょっと、あけて　みました。さあ　たいへん。でて　きたのは　おばけです。

はまぐりひめ

一

むかし　むかし、ある　うみべに、わかい　りょうしが、おかあさんと　ふたりで　くらして　いました。

この　りょうしは、としよりの　おかあさんを、それは　それは、だいじに　して　あげるので、

「なんて、おやこうこうの　むすこさんだろう。」

つり　あげた　はまぐりは、みるみる　おおきく　なって、なかから、おひめさまが、でて　きました。

ふねの　なかへ　ごろんと、なげだしました。

　すると、たいへん。はまぐりは、ずんずん　おおきく　なって

と、きんじょの　ひとたちは、とても　かんしん
して　いました。

ある　あさ、りょうしは、いつものように、つりに
でかけました。

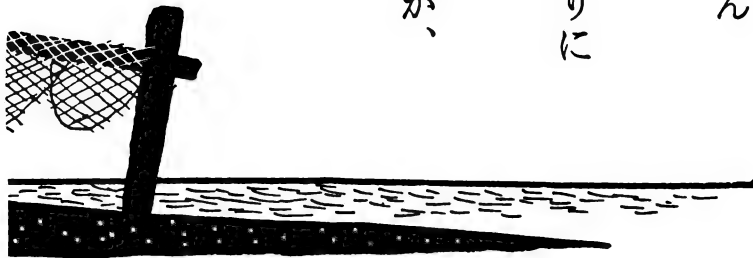
ふねで、とおくまで　でて、つって　みましたが、

どう　した　ことか、一ぴきも　つれません。

ひるごろ、やっと、なにか　かかりました。

あげて　みると、ちいさな　はまぐりです。

「なんだ、こんな　もんか。」

がっかり　して、いとから　はずして、

いきました。

おどろいた　りょうしが、めを　まるく　して　みて　いると、かいの　くちが、すこしずつ　あいて　きます。

すきまから、ぴかっと、ひかりが　さしました。かいは、ぱっと　われて、なかには、うつくしい　おひめさまが　すわって　います。

「あ、あ、あなたは、どなたですか。」

りょうしは、びっくり　して　ききました。おひめさまは、かなしそうな　かおを　して、

のどくに　おもって、
「こんな　うちですけれど、よかったら、いつまでも　いらっして　くださいい。」
やさしく　いいました。おひめさまは　うれしそうに、
「おねがい　いたします。」
と、あたまを　さげました。

二

「りょうしの　うちに、てんにんが　きたそうだ。まぶしい　ほど、ひかって　いるそうだよ。」

「わたくしは、どこから　きたのか　しりません。どこへ　いったら　いいかも、わかりません。おねがいです。あなたの　おうちへ、つれて　いって　ください。」
「でも、わたしの　うちは　きたない　うちです。」
「どんな　おうちでも、よろこんで　いきます。どうぞ、おつれください。」
りょうしは　しかたなく、うちへ　つれて　いって、おかあさんに　わけを　はなしました。
おかあさんは、あんまり　おひめさまが　りっぱなので、びっくり　しました。そして、いく　ところが　ないと　きくと、き

そう　いう　うわさが、ひろまりました。
とおい　くにの　ひとたちまで、おがみに　いこうと、まいにち、ぞろぞろ　あつまって　きました。
みんな、おこめや、あさの　いとを、もって　きました。おこめも　いとも、ずんずん　たまりました。
ある　ひ、おひめさまは、
「この　たくさんの　いとで、これから、はたを　おります。できあがるまで、みないで　ください。」
そう　いって、ひとまへ　はいって、とんとん　からからと、おりはじめました。

一（いち）にち　あるきましたが、三（さん）ぜんりょうと　いう　たかい　ねだんに　おどろいて、だれも　かって　くれません。
がっかり　して、かえりかけました。

三

その　とき、むこうから、うまに　のった、りっぱな　おじいさんが、おおぜいの　おともを　つれて、やって　きました。
りょうしは、もしやと　おもって、
「これを　かって　くださいませんか。」
と、おりものを　だしました。

二十一にち　たって、おひめさまは、へやから　でて　きました。
「やっと　できあがりました。」
と、うれしそうに、おりものを　ひろげました。
その　りっぱな　こと、うつくしい　ことは、めも　くらみそうです。
「これを　みやこへ　もって　いって、三ぜんりょうで、うって　きて　ください。」
ひめに　そう　いわれて、りょうしは、おりものを　かかえると、みやこへ　いきました。

やろう。」

「三(さん)ぜんりょうですが。」

「いいとも。 いっしょに うちへ おいで。 おかねを あげるから。」

りょうしは おおよろこびで、 おじいさんの あとから、 ついて いきました。

ずいぶん とおい ところでした。

おじいさんの うちは、 りゅうぐうじょうのような、 それは それは、 りっぱな ごてんでした。

あたりには、 きれいな はなが、 いっぱい さいて いて、 い

おじいさんは、それをひろげて、ながめると、すっかり かんしん して、「おお、これは めずらしい ものだ。かって

おじいさんは、そのくもに

い　においが　して　います。

たのしい　おんがくも、きこえます。

りょうしは、りっぱな　へやで、ごちそうを　いただいたり、うつくしい　おひめさまたちの　おどりを　みたり　しました。

その　うちに、おじいさんは、三ぜんりょうの　おかねを、けらいに　もたせて、

「この　りょうしの　うちへ、とどけなさい。」

と、いいつけました。

それから、そらの　ほうへ　てを　あげて、なにか　あいずをすると、しろい　くもが、しずかに　おりて　きました。

「この、三ぜんりょうの　おかねが　あれば、これから　さき、おかあさんと　あなたは、いっしょう　らくに　くらして　いかれます。これで　わたしは、おわかれ　いたします。」
「えっ、まあ、なにを、まあ。」
りょうしと　おかあさんは、びっくり　して、くちも　よくきけません。
　おひめさまは、また　いいました。
「いままで　みのうえを　かくして　いましたが、わたくしは、ほんとは、かんのんさまの　おつかいなのです。あなたは　いつも、おかあさんを　たいせつに　して　おいででした。かんのん

のると、そらへ　のぼって　いって　しまいました。

「かみさまだったのか。」

りょうしは、てを　あわせて、みえなく　なるまで、おがんでいました。

ふと、きが　つくと、ごてんも　ひとも、みんな　きえて、なんにも　ありません。ゆめのようです。

うちへ　かえって　みると、おかねは、もう　ちゃんと、とどいて　いました。

おひめさまは、かえって　きた　りょうしを　みると、しずかに　いいました。

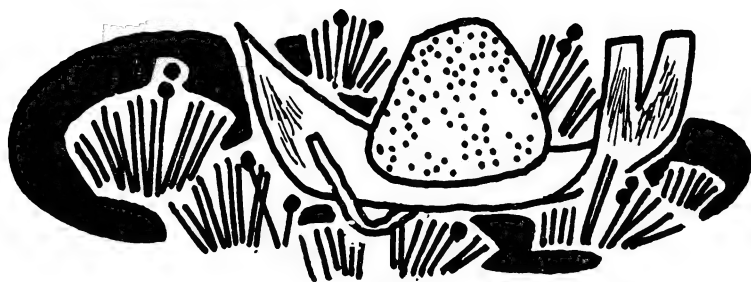
そらから、しろく　ひかる　くもが、おりて　きました。おひめさまを　のせると、また、しずかに　のぼって　いきました。

りょうしは、たくさんの　ひとから　うやまわれて、おかあさんと、いっしょう　しあわせに　くらしました。

さまは、そ　れを　たいそう　かんしん　なさって、しあわせに　して　やりたいと、わたくしを　ここへ　よこされたのです。もう　わたくしの　ごようは、すみました。てんの　おくにへ　かえります。どうぞ、おげんきで。さようなら。」

なかに、おむすびが　おちて　いました。
かにが　みつけて、ひろいました。
さるは、おむすびが　ほしくてたまりません。
「かにさん、おむすびは、たべれば　すぐになくなるね。だけど、かきの　たねは、まいておくと、きに　なって、みが、

さるかに　かっせん

一

むかし　むかし、かにと　さるが、むらの　みちを　あるいて　いました。

みちに、かきの　たねが　おちて　いました。

さるが　みつけて、ひろいました。

すこし　いくと、くさの

はやく　きに　なれ、かきの　めよ。
ならぬと、はさみで　ちょんぎるぞ。

ちょき　ちょき　ちょっきん、はさみの　おとを　させて　いると、めは　ずんずん　のびて、おおきな　きに　なりました。

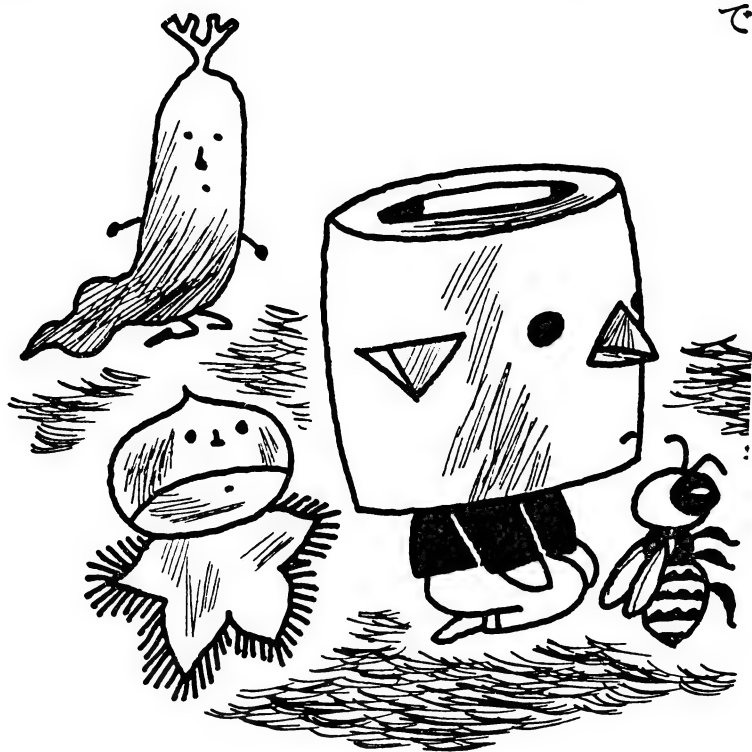
はやく　みが　なれ、かきの　きよ。
ならぬと、はさみで　ちょんぎるぞ。

また、いくにちも、ちょき　ちょき、おとを　させて　いると、やがて、たくさんの　みが、おいしそうに　なりました。

さるは、それを　みつけました。うらやましく　なって、かにの　うちへ　いきました。

たくさん　なるよ。とりかえて　やろう。」
かにが　へんじも　しない　さきに、さるは　おむすびを　とりあげて、むしゃむしゃ　たべて　しまいました。
かには、うちの　にわへ、おむすびと　とりかえた　かきのたねを　まきました。
まいにち、みずを　やりながら、
はやく　めを　だせ、かきの　たね。
ださぬと、はさみで　ちょんぎるぞ。
ちょき　ちょき　ちょっきん、はさみの　おとを　させて　いると、あくる　ひ、かわいい　めが　でました。

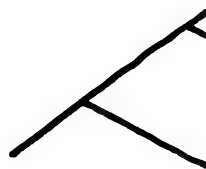
「かにさんは、きに　のぼれないね。ぼくが　のぼって、とって
やろうか。」
「ああ、たのむよ。」
さるは　きに　のぼると、あかい　おいしい　かきを　とっ
て、すまして　たべて　います。
したで、まって　いる　かにが、さいそく　すると、あおくて
しぶいのを、なげて　よこしました。
かには　はらを　たてました。
「しぶいので　なくて、あまいのを　よこせよ。」
「うるさいっ、これでも　たべろ。」

そこへ、はちが　とんで
きました。
「どう　したんだい、こ
がにくん。」
　こがには、わけを
はなしました。
「よし。なかよ
しを　みんな
あつめて、さるを
ひどい　めに　あわせて

さるは、　あおい　おおきな　かきを、　ちから
いっぱい、　なげつけました。
かには　おおけがを　して、　しにそうに
なりました。
こがにが　みつけて、　うちへ　はこび
ました。　こがには、　かなしくて、
くやしくて、　わあわあ　ないて
いました。

二

こんぶは、でぐちの　そばに。
うすは、でぐちの　やねの　うえに。
そこへ、さるが　かえって　きました。
「ああ、のどが　かわいた。どれ、おちゃでも　のもうか。」
さるは、いろりの　まえに　すわって、やかんに　てを　かけました。
すると、はいの　なかに　かくれて　いた　くりが、ぽんと　はねて、さるの　ほおを、ちからいっぱい　うちました。
「わっ、あついっ。」
さるは、ほおを　おさえて、だいどころへ　とんで　いきまし

やろう。」
はちは、ぶんぶん　とんで、なかの　いい　くりと、こんぶと、うすの　うちへ、はなしに　いきました。
みんなも、すごく　おこって、すぐに、さるの　うちへ　でかけました。
さるは、るすでした。
「ちょうど　いい。みんな　かくれて　いて、うまく　やろうよ。」
みんなは　いそいで、かくれました。
くりは、いろりの　はいの　なかに。
はちは、みずおけの　かげに。

めの　うえを、　ちくんと　さしました。
「わっ、いたいっ。」
あわてて、そとへ　にげだしました。すると、
でぐちに　ねそべって　いた、ぬれた　こんぶに、
つるっと　あしを　すべらせて、すってん　ころり。
そこへ、やねの　うえから、うすが、どさりと　とびおりて、
さるを、うんと　おさえつけました。
おもい　うすの　したに　なった　さるは、かおを　まっかに
して、うんうん　くるしがりました。
こがにが、とことこ　やって　きました。

た。

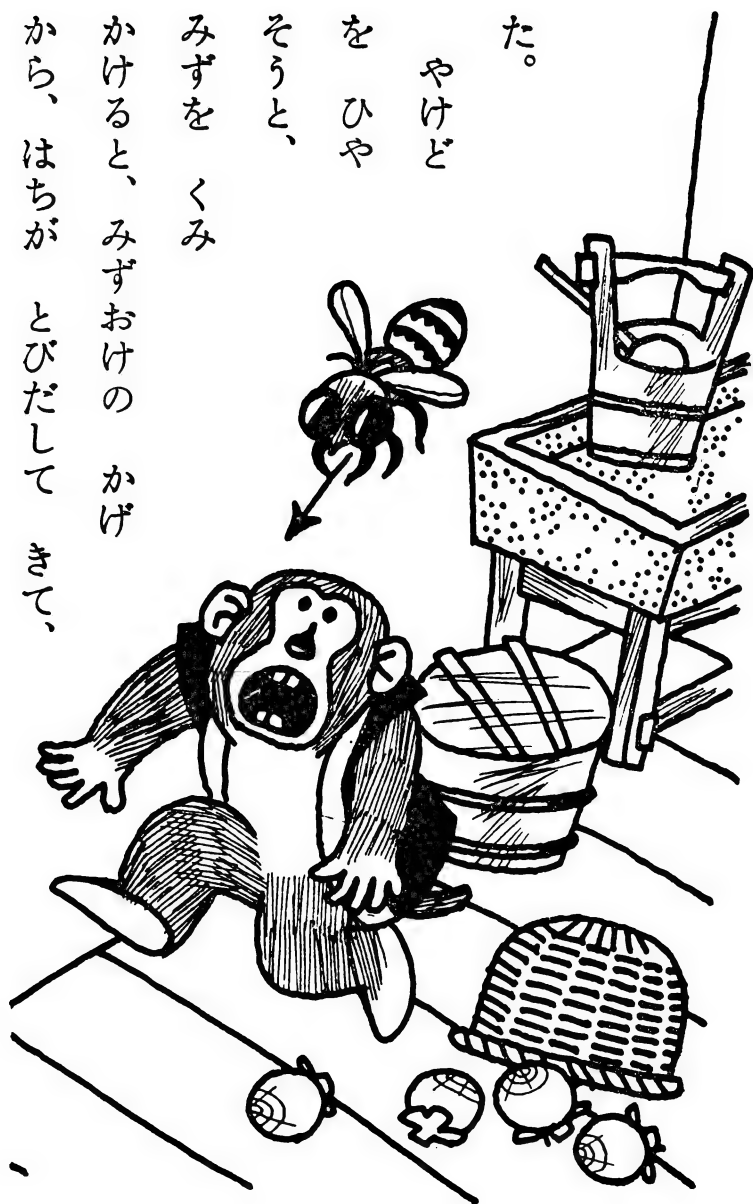
やけど

を　ひや

そうと、

みずを　くみ

かけると、みずおけの　かげ

から、はちが　とびだして　きて、

「たすけて　やりましょうか。」
と、みんなに　いいました。
「もう　こりて、ほんとに　わるい　ことを　しないなら、たすけて　やっても　いいね。」
とうとう、たすける　ことに　しました。
さるは　おおよろこびで、かにの　おとうさんの　ところへ、おわびに　いきました。

うすが、こえを　かけました。
「こがにくん、ここへ　おいで。きみの　はさみで、さるの　くびを、ちょんぎって　おやり。」
こがには　よろこんで、そばへ　よって、はさみを　たかくふりあげました。
さるは　きいきい　ないて、かおじゅう、なみだだらけです。
「ゆるして　おくれ。もう　わるい　ことは　しません。どうぞ、ゆるして。」
と、いっしょうけんめいに　たのみました。
こがには、かわいそうに　なりました。

「わたしは、とおい　ところから、たびを　して　きた　ものです。くたびれて、もう　あるけません。どうぞ、

あかい おわん

一

むかし、ある　もりの　そばに、びんぼうな　きこりが、すんでいました。

ある　ひの　ゆうがた、ひどく　よわった　ひとりの　おじいさんが、つえを　つきながら、きこりの　うちに、やって　きました。

「おかげさまで　たすかりました。わたしは、あなたに　おれいを　したいと　おもいます。もりの　おくに、おおきな　いけが　あるのを　しって　いますか。」

「ええ、よく　しって　います。」

「あの　いけの　そばへ　いって、てを、三つ　たたいて　ください。そう　すれば、いつでも、ごちそうを　さしあげます。ただ、おぜんや　おわんは、きっと　かえして　ください。わたしは、あの　いけの　こいです。」

そう　いったかと　おもうと、おじいさんは　きえて　しまいました。

一（ひと）ばん　とめて　ください。おねがいです。」

「それは　きのどくだなあ。こんな　ぼろいえで、たべる　ものも　ないが、それでも　よかったら、とまって　おいでなさい。」

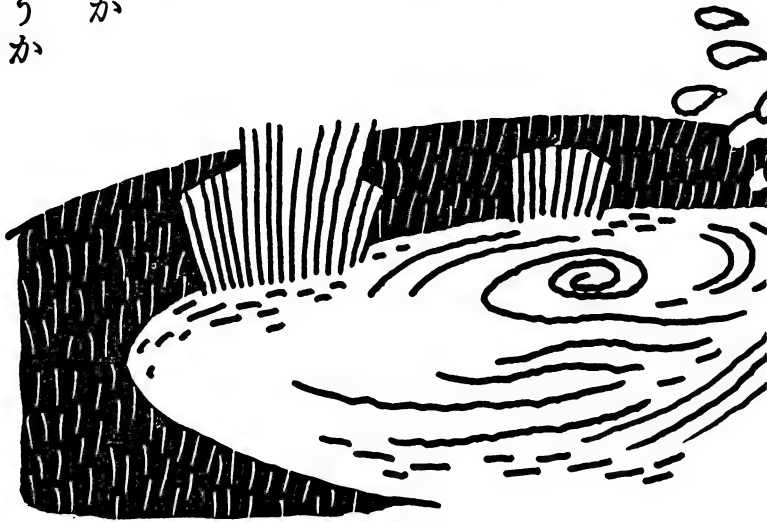
おじいさんは　よろこんで、はいって　きました。

きこりは、じぶんの　ぶんの　ごはんを、おじいさんに　やって、じぶんは、みずを　のんで　すませました。

ふとんも、じぶんのを、おじいさんに　しいて　あげ、じぶんは、わらの　なかへ　ねました。

あさに　なると、おじいさんは、ていねいに　おれいを　いって、

さまならば、ほんとの　ことに
ちがいない。とにかく　ためし
て　みよう。」
　きこりは、いそいで　いけの　と
ころへ　いって、てを、ぽん　ぽん
ぽんと、三つ　たたいて　みました。
　じっと　みて　いると、いけの
まんなかの　みずが、ぶくぶく　あ
わだって　きました。あわの　なかか
ら、りっぱな　あかい　おぜんが、うか

二

きこりは、ふしぎでたまりませんでした。

「けむりみたいに きえて しまうなんて、おかしいなあ。もしかすると、こいの かみさまだったんだな。かみ

「うわっ、ふしぎ　ふしぎ。だれが、おぜんを　さげに　くるんだろう。」

きこりは、おもしろくって、うれしくって　たまりません。

それからは、まいにち、いけに　いって、てを　たたいては、ごちそうを　だして　もらって、たべました。

たべては、おぜんを　かえしに　いきました。

きこりは、やまへ　いって　はたらく　ことが、もう　ばかばかしく　なりました。

まいにち、ごちそうを　たべて、ぶらぶら　あそんで　くらすように　なりました。

びあがりました。 おぜんには、 ごちそうが、 たくさん のって

います。

おぜんは、 だんだん、 きこりの そばへ よって きました。

きこりは こしを かがめて、 おぜんを とりあげました。

こぼさないように だいじに もって、 うちへ かえりました。

たべて みると、 その おいしい ことと いったら、 まるで

ほっぺたが とけて しまいそうです。

のこらず たべおわると、 おじいさんに いわれた とおり、

おぜんを、 いけに もって いきました。

みずに うかべると、 おぜんは ぶくぶくと しずみました。

ごちそうばかりで　なく、おわんまで　ほしく　なりました。

「この　あかい　おわんは、すごく　りっぱだなあ。ほしいなあ。そうだ、一つくらい　とったって、わかりゃ　しないよ。いつも、ちゃんと　かえして　いたんだもの。たまにゃあ　いいさ。」

おわんを　一つ、とだなに　かくして、あとを、いけに　かえしました。

その　あくる　ひ、きこりは　いけへ　いって、いつものよう

三

なまけもの
に　なった
きこりは、ここ
ろまで　だら
しの　ない
おとこに　なり
ました。
とうとう、

ところが、その　ばん、とだなから　ひが　でて、あっと　いう　まに、きこりの　うちは　やけて　しまいました。なに　一つ　のこりません。

「あーあ、ばかな　めに　あったもんだなあ。また　きょうから　はたらかなくちゃ。」

　きこりは、やけこげた　きを、のろのろと　かたづけはじめました。

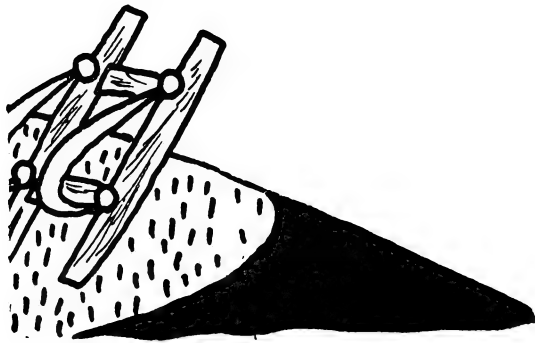
に、てを　たたきました。
「おやっ、でて　こない。どう　したんだろう。」
きこえなかったのかと、また　たたきました。
まっても　まっても、でて　きません。
「ざんねん。さては、ぬすんだ　ことが　わかったな。」
きこりは　がっかり　して、しょぼ　しょぼ　かえりみちに
むかいました。
「まあ、いいや。あの　ぬすんだ　おわんを　うれば、たくさん
の　おかねに　なる。がっかり　するなよ。」
と、じぶんを　なぐさめて　いいました。

ほうで、
うんとこ　どっこい、
どっこい　どっこ
い。
と、いう　かけご
えが　きこえました。
「はて、なんだろう。」
おじいさんが　いっ
て　みると、やせた
ねずみと、ふとった

ねずみの すもう

一

むかし、ある やまの ふもとに、おじいさんと おばあさんが、すんで いました。

ある ひ、おじいさんが やまへ しばかりに いくと、むこうの

「あるったけの　おかねで、もちごめを　かって、もちを　ついて　やろうよ。」

ふたりは、ぺったん　ぺったん、もちを　つきました。

おばあさんは、それを、ちいさく　六十に　まるめて、二十だけ、ねずみの　でそうな　ところへ　ならべました。

あさ　みると、みんな　なくなって　いました。

二

あくる　ひ、おじいさんが　しばかりに　いくと、きのうと　おなじ　かけごえが　します。

ねずみとが、すもうを　とって　いるのでした。

きの　かげに　かくれて、そっと　みると、やせた　ねずみは、おじいさんの　うちの　ねずみで、ふとった　ほうのは、おかねもちの　うちの　ねずみでした。

ふとった　ねずみは　ちからが　あって、やせた　ひょろひょろねずみを、すぽん　すぽん、まかしました。

「かわいそうに。うちは　びんぼうで、ろくに　たべものが　ないから、ねずみまで　おなかが　すいてて、まけちまう。」

おじいさんは、いそいで　うちへ　かえって、おばあさんに、その　はなしを　しました。

したの。
一（ひと）ばんの
うちに、こんな
に　つよく　なる
なんて、へんだなあ。」
　かねもちの　うちの　ねずみが
いいました。
「ゆうべ、おもちを、うんと　ごちそうに　なったんだよ。しん
せつな　おじいさんと　おばあさんが、たくさん　ついて　くれ

いって　みると、おじいさんの　うちの　ねずみは、とても
つよく　なって　いて、どう　しても、
しょうぶが　つきません。
ひきわけです。
「きみ、
どう

あくる　あさ、みると、おもちは　みんな　なくなって　いました。

その　かわり、こばんが　ぴかぴか、たくさん　おいて　ありました。

おじいさんは、やまへ　すもうを　みに　いくと、二ひきのいきおいは　たいへんな　ものでした。

どしん　どしんと　ぶつかって、うわてなげ、よりきり、おしだし、やぐらなげと、その　おもしろい　ことと　いったら　ありません。

おじいさんは　つい、とびだして、

たのさ。」
「じゃ、ぼくも　いくから、ごちそう　して　おくれよ。」
「ぼくんちは、うんと　びんぼうなんだよ。きみが、たくさん　おかねを　もって　くるなら、ごちそう　して　やっても　いいよ。」
　おじいさんは、いそいで　かえって、おばあさんに　みて　きた　ことを　はなしました。
「まあ、そうですか。あと　二かぶんと　おもったのですが、じゃあ、あとの　おもちを　ぜんぶ、ゆうべの　ところに　ならべましょう。」

ねずみの　すもうです。びんぼうな　おじいさんの　いえの　やせねずみは、まけてばかり　います。

「はっけよいや、のこった　のこった。やせっぽ　しっかり。ふとっぽ　しっかり。ふとっぽ　がんばれえ。」
と、ぎょうじと　おうえんを、ひとりで　やりました。

二ひきは、いくど　とりなおして　みても、どう　しても　しょうぶが　つきません。

また　ひきわけです。とうとう、てを　うって、おしまいになりました。

おじいさんと　おばあさんは、おかねもちの　いえの　ねずみが、おいて　いった　おかねを　もとに　して、しょうばいをはじめ、たいへんな　おかねもちに　なりました。

かちかちやま

一

むかし、ある　やまの　ちかくに、おじいさんと　おばあさんが、すんで　いました。

その　やまには、とても　わるい　ふるだぬきが　いました。まいにち、おじいさんの　はたけに　やって　きて、おじいさ

わるい　たぬきが　しょってる　しばは、うさぎに　ひを　つけられて、ぼうぼう　もえはじめました

おばあさんは、もの
おきの　そばで、
うすに　むぎを
いれて、うんとこ
うんとこ　ついて
いました。
　たぬきは　それを　みる
と、
「おばあさん、たいへんだね。
わしが、かわって　ついて　あげよう。

んに、いしゃ　ぼうを　なげつけたり、はたけの　やさいを　あらしたり　しました。

　おじいさんは、とうとう　おこって、わなを　かけました。

　ある　あさ、いい　あんばいに、たぬきが　わなに　かかりました。おじいさんは　よろこんで、たぬきを　しばって、うちへもって　かえりました。

「おばあさん、いい　ものを　とって　きたよ。こんやは　こいつで、たぬきじるを　こしらえて　おくれ。」

　そう　いって、ものおきの　はしらに　たぬきを　しばりつけて、また、はたけに　でて　いきました。

ば、にげるじゃ　ないか。」
「にげや　しないよ。あんまり、なわが　いたいから、ちょっとでも　といて　もらえば、わしゃ　おおだすかりさ。そしたら、むぎを　ついて　あげて、つけたら　また、しばられるよ。きっとだよ。」
おひとよしの　おばあさんは、なわを　といて　やりました。
たぬきは、いきなり、おばあさんを　うんと　ぶんなぐって、にげて　しまいました。
ゆうがた、おじいさんが　かえって　きました。

この なわ
を といて
おくれ。」
「だめ だめ。 なわを とけ

「うさぎくん、いい　ものを　もって　いるね。ぼくにも　すこし　わけて　くれないか。」
「だいじな　まめだが、やっても　いい。その　かわり、この　しばを、やまの　したまで　しょって　いくんだぞ。」
「おやすい　ごようだ。」
たぬきは、しばを　しょって　あるきだしました。
「みちが　せまいから、きみ、さきに　いけ。」
うさぎは　あとから　あるきながら、いしと　いしを、かちかち　ぶっつけて、ひを　だして、たぬきが　しょって　いる　しばに、ひを　つけました。

おばあさんが　しにそうに　なって、ねて　いました。おじいさんは　わけを　きいて、かんかんに　おこりました。
そこへ、うさぎが　あそびに　きました。おじいさんから　はなしを　きくと、うさぎも　はらを　たてました。
「あいつぐらい、わるい　やつは　ありません。みんなが、ひどい　めに　あって　います。うんと　やっつけて　やりましょう。」
あくる　ひ、うさぎは、まめを　いって、こしに　さげて、やまで　しばを　かって　いました。
いりまめが、ぷんぷん、とても　いい　においが　したので、たぬきが　あなから　でて　きました。

「うしろで　ぼうぼう
いうのは　なんだね。」
「ここは　ぼうぼう
やまだもの。ぼうぼう
いうさ。」
「うん、そうか。」
その　うちに、ひは、どんどん
もえあがりました。
「おお、あつ、あつ、つ、つ。」
たぬきは、じめんを　ころがりまわって、くるしみました。

「いま、うしろで
かちかち　いった
のは　なんだね。」
　と、たぬきが　ききま
した。
「ここは　かちかちやまだ
もの。かちかち　いうさ。」
「うん、そうか。」
　その　うちに、しばは、ぼ
うぼう　もえはじめました。

「うん。ずっと　よく　なった。だが、まだ、げんきが　ないんだよ。」

「あそびに　いけば、なおるよ。いこう。」

「やまは　こりごりだ。」

「じゃあ、うみに　いこうよ。ふねに　のると、とても　せいせい　するから。」

　たぬきは、それも　そうだと　おもったので、うさぎに　ついて、うみへ　いきました。うみべに、きの　ふねと　どろの　ふねが、つないで　ありました。

「ぼくは　しろいから、しろい　ふねに　のるよ。」

やっと、しばを　ふりおとして、あなへ　にげこみました。

二

うさぎは、もっと、たぬきを　こらしめて　やらなければ、きが　すみません。こんどは、せっせと　ふねを　こしらえはじめました。

きの　ふねと、どろの　ふねと、二そうの　ふねが　できあがりました。

そこで、たぬきの　うちへ　いきました。

「こないだは、ひどい　めに　あったね。もう　なおったかい。」

と、うさぎは、きの　ふねに　のりました。

「ぼくは　くろいから、くろい　ふねに　のるよ。」

たぬきは、どろの　ふねに　のりました。

「ああ、いい　かぜだ。むこうの　しままで　こぎっこを　しようよ、たぬきくん。」

「やろう。おれが　かっても、なくな。ないたら、うみへ　けっとばすぞ。うさこうなんか　へっちゃらの　ちゃらだからな。」

たぬきは、すこし　げんきが　でると、すぐに　にくまれぐちを　ききます。

「ふふふ。さあ、やろう。よーい、どん。」

「お、おれは、わ、わ、わるい　ことなんか　した　こと　ないよ。
一（いち）どだって　ないよ。」
「おじいさんとこの　おばあさんを　だまして、ぶんなぐって、しにそうに　したじゃ　ないか。」
「あ、あれは、つい、つい。」
「なにが　ついだ。」
「くるしいよう。あぷあぷ。たすけて　おくれ、うさぎさん。」
「なにが　うさぎさんだ。うさこうなんか　へっちゃらの　ちゃらだって　いったじゃ　ないか。」
「わるかったよ。あぷあぷ。ぼくは　たしかに　わるだぬきだっ

うさぎは、くっくっと　こぎだしました。
たぬきも、くっくっと　こぎだしました。
その　うちに、たぬきの　どろぶねは、どろが、どろどろ　とけて　きました。
「おやっ、へんだぞ。」
と　いう　まに、たぬきは　どろんこに　なって、うみに　おちて　しまいました。
「たすけて　くれ、たすけて　おくれ。しんじゃうよう。」
「しんじゃうなら　しんじゃえ。おまえのような　わるものは、いきて　いない　ほうが、みんなの　ために　なる。」

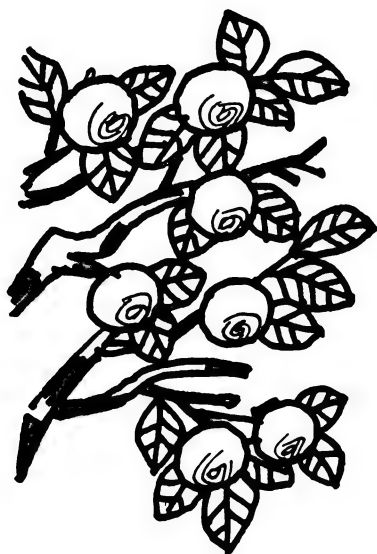
「よし、これに
つかまれ。」
うさぎは、かい
を、みずの　なかに　のば
しました。
どろんこだぬきを、ふねに　ひき
あげて、しおみずを　はかせて、たすけ
て　やりました。さすがの　ふるだぬき
も、それからは、二どと　わるい　ことは
しなく　なりました。

た。これからは　もう、わるい　ことは　しない。」

ぶくぶくぶく。くるしそうに　いきを　して、たぬきは　しずみかけました。

「きっとか。きっと、わるい　ことを　しないか。」

「きっと、きっと、きっ。」

ぶくぶくぶく。もう　しぬばかりです。

ぞうりを　はいて、ぴたぴたと
あるいて　いきました。
おおきな　いえの　うらも
んへ　でました。うらもんの

あまい かき しぶい かき

一

むかし、ある　いなかに、まつぞうと　いう　こと、たけぞうと　いう　こが　いました。
あきの　ある　ひです。ふたりは、あそびに　でかけました。
むかしの　ことですから、ふたりとも、きものを　きて、わらの

いっぱい　とって、おりて　きました。その　とき、うちの
なかから、つなを　もった　おとこが、そっと　でて　きました。
たけぞうは　きが　ついて、ぱっと　にげて　しまいました。
おとこは、にげおくれた　まつぞうを、かきの　きに、ぐるぐ
ると　しばりつけました。
「やい、こぞう。わるい　ことを　した　ばつだぞ。一ばん　こ
こに　しばられて　いろ。」
「おれじゃ　ないよ。おれじゃ　ないよ。にげた　こだよう。」
まつぞうが、いくら　さけんでも　ききません。おとこは、い
って　しまいました。

そばに、おおきな　かきの　きが　あって、まっかな　かきが、
えだが　おれそうに、たくさん　なって　いました。
「うまそうだな。とって　たべようよ。」
たけぞうが　いいました。
「いやだ。おれ、ひとの　ものなんか、とらない。」
まつぞうは、くびを　ふりました。
「かまうもんか。」
たけぞうは、するすると、かきの　きに　のぼって　いきました。あかくて、おおきくて、おいしそうなのを　よって、とっては　ふところへ　いれ、とっては　ふところへ　いれました。

ました。

「おかあちゃん、しんぱい　してるだろうなあ。」

まつぞうは、しくん　しくん　ないて　いました。

その　とき、きの　うえから、よく　じゅくした　かきが、いくつも　いくつも、おりて　きました。

たけの　とった　かきの　み、
しぶく　なれ、しぶく　なれ。
しん　しん　しぶく　なれ。
まつの　とった　かきの　み、

二

あたりは、だんだん　くらく　なり

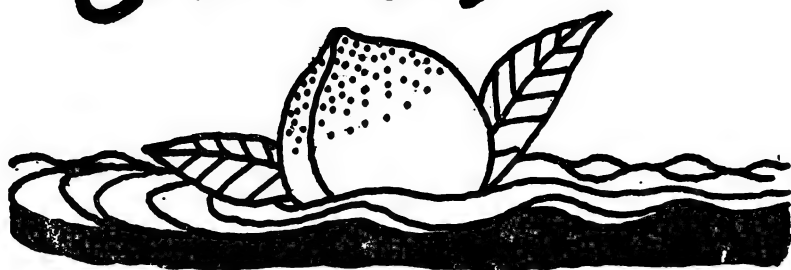
「ふしぎな　ことも　あるもんだね。」
ふたりは　おどろきながら、かきを　だして　たべて　みました。
その　あまい　ことと　いったら、まるで　おさとうの　かたまりみたいで、ほおが　うずうず　する　ほど　おいしいのでした。
たけぞうが、うちへ　かえって、かきを　だして　みると、あんなに　あかかった　かきが、みんな、まっさおに　なって　いました。しぶくて　しぶくて、とても　たべられなかったと　いう　ことです。

あまく　なれ、あまく　なれ。
あん　あん　あまく　なれ。

うたいながら、みんなで、まつぞうの　つなを　といて　くれました。
その　うえ、その　かきたちは、まつぞうの　ふところへ、みんな　ころころ、はいって　くれたのです。
まつぞうは　よろこんで、うちへ　はしって　かえりました。
「ただいま。おかあさん、たいへん　たいへん。」
しんぱい　して　いた　おかあさんに、わけを　はなしました。

ある　ひ、おじいさんは、やまへ
しばかりに　でかけました。
ゆうがたに　なると、かった
しばを　いっぱい　しょって、やっ
こら　やっこら、かえって　きました。
「おかえんなさい、おじいさん。」
と、おばあさんは　にこにこ　して、
「きょうは、とても　いい　ものを　ひろ
いましたよ。はやく　きて　ごらんなさい。」
おじいさんが　いって　みると、まないたの

ももたろう

一

むかし　むかし、ある　やまの
ふもとの　ちいさな　うちに、おじ
いさんと　おばあさんが、すんで
いました。

ももが　のせて　あります。

「やあ、りっぱな　ももだなあ。」

「きょう、うらの　かわで　おせんたくを　して　いたら、ながれて　きたんですよ。おいしそうですね。さあ、たべましょう。」

おばあさんは、ほうちょうを、ももの　あたまへ　ちょんと　のせました。のせると　いっしょに、ももは　ひとりで　ぱんと　二(ふた)つに　われました。

おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ。

ももの　なかには、あかちゃんが　いたのです。まっかな　かおを　して　なきだしました。

うえに、お
おきな　おお
きな、びっくり
する　ほど　おおきな

っぽん一 りっぱな こどもに なりました。
ある ひ、ももたろうは いいました。
「おじいさん、おばあさん。ぼくは、おにがしまへ おにたいじに いって きます。」
「えっ、おにたいじ。」
「ええ。おには こどもを さらったり、たからものを ぬすんだり、わるい ことばかり して います。おおぜいの ひとが こまって いるから、ぼく、やっつけて きます。」
「うん、よかろう。いって きなさい。」
おじいさんは うなずきました。

おじいさんと　おばあさんは、びっくり　したり、よろこんだり。

「なんて　かわいい　あかちゃんだろう。かみさまが、わたしたちに　くださったのに　ちがいない。だいじに　そだてましょう。」

ももの　なかから　うまれたので、あかちゃんの　なを、ももたろうと　つけました。

二

ももたろうは、ずんずん　おおきく　なりました。きが　やさしくて、とても　ちからもちです。その　うえ　かしこくて、に

おじいさんと
おばあさんは、
もんの　とこ
ろまで　み
おくりました。
しばらく　いくと、

「じゃあ、きびだんごを　こしらえて　あげよう。たべると　ちからが　でるからね。」

おばあさんは　そう　いって、きびだんごを　たくさん　つくりました。

ももたろうは、にっぽん一と　かいた　はたを　しょって、ひのまるの　せんすを　もちました。こしには、かたなを　さして、きびだんごの　ふくろも　さげました。これで　したくは　できました。

「いって　まいります。」

と、げんきよく　いいました。

にっぽんいち

おおきな　いぬが　かけて　きました。
「ももたろうさん、ももたろうさん。どこへ　いくんですか。」
「おにがしまへ　おにたいじに。」
「こしに　さげた　ものは、なんですか。」
「にっぽん一の　きびだんごだ。」
「一つ　ください。おとも　します。」
「よしよし、やるから　ついて　こい。」
いぬは、きびだんごを　たべて、よろこんで　ついて　きました。ずんずん　いって、やまを　とおりかかると、おおきな　さるが　でて　きました。

三

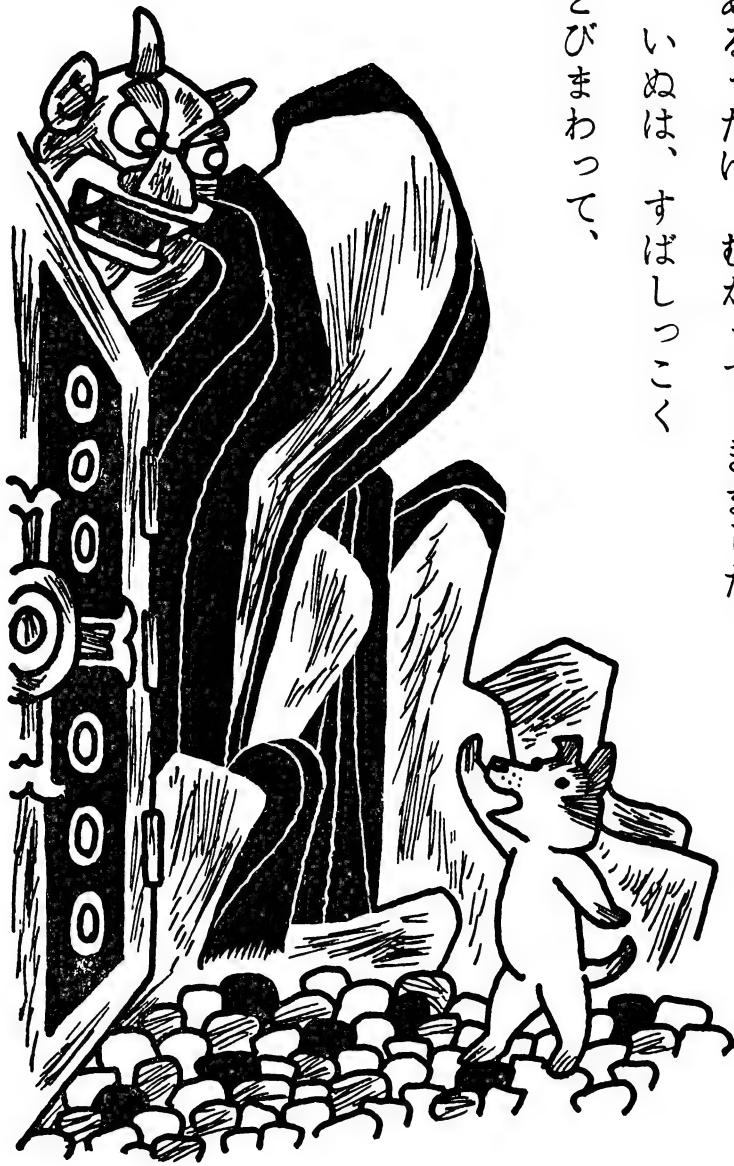
ももたろうは、いぬと　さると　きじを　つれて、ふねに　のって、おにがしまへ　つきました。

しまには、てつで　できた、ものすごい　おにの　おしろが　ありました。てつの　もんの　まえには、おおぜいの　あかおにと　あおおにが、ばんを　して　いました。

まっさきに、いぬが　いって、いいました。

「やい、おにども。にっぽん一の　ももたろうさんが、おにたいじに　いらっしゃったぞ。もんの　とを　あけろ。」

「ももたろうさん、ももたろうさん。どこへ　いくんですか。」
「おにがしまへ　おにたいじに。」
「こしに　さげた　ものは、なんですか。」
「にっぽん一の　きびだんごだ。」
「一つ　ください。おとも　します。」
「よしよし、やるから　ついて　こい。」
さるも　もらって、よろこんで　ついて　きました。
のはらへ　でると、こんどは、きじが　とんで　きました。
「わたしにも、にっぽん一の　きびだんごを　ください。」
きじも　もらって、よろこんで　ついて　きました。

あるったけ　むかって　きました。
いぬは、すばしっこく
とびまわって、

「なまいき　いうな。だれが　きたって、しおを　つけて、くって　やるぞ。」

おには、かっと　くちを　あけました。

その　とき、きじが　とんで　きました。くちばしで、おにたちの　めを、つんつん　つっつきました。おには、みんな　めが　みえなく　なりました。ないたり　さわいだり　するばかりです。

その　まに、さるが　もんを　のりこえました。かぎを　はずして、もんを　あけました。

ももたろうも　いぬも、ゆうゆうと　はいって　いきました。

おしろじゅう、おおさわぎに　なりました。けらいの　おにが

わあわあ　にげだしました。

おにの　たいしょうの　あかおには、ふとい　てつの　ぼうを、ぶんぶん　ふりまわして、ももたろうに　むかって　きました。

ももたろうは、そこに　あった　てつの　ぼうを　とりあげました。それを、ぴゅう　ぴゅう　ふりまわすと、たいしょうの　てつの　ぼうは、ぐわーんと　はねとばされて　しまいました。

おにの　たいしょうは、すっかり　おどろきました。もう、かなわないと　おもったのでしょう。ももたろうの　まえに、ぺたりと　すわって、ていねいに　おじぎを　しました。

みんなに　かみつき
ました。
　さるは、
きっきと
ひっかき
ました。
　きじは、め
だまを　つっ
つきました。
　おにどもは、

ももたろうは、おにたいじに　いく、したくが　できると、げんきよく、おにがしまへ　でかけました。

「もう　これからは、わるい　ことは　しません。いい　おにに
なります。おゆるし　ください。」
「きっとか。」
「きっとです。やくそく　します。」
「では、ゆるして　やる。」
おには　よろこんで、おくらに　いっぱい　しまって　あった
たからものを、みんな　だして　きました。
ももたろうは、その　たからものを、のこらず　くるまに　つ
んで、おうちへ　かえって　いきました。
おじいさんも　おばあさんも、おおよろこびでした。

きつねの　しくじり

一

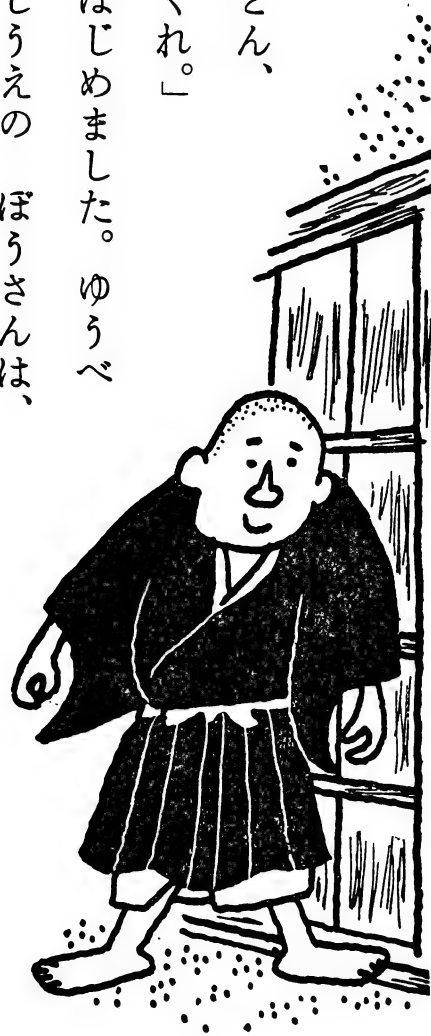
むかし　むかし、ある　ところに、やまでらが　ありました。
つきの　あかるい　ばんの　ことです。とん　とん、いりぐちの
とを　たたいて、
「あけて　おくれ。あけて　おくれ。」
と、いう　こえが　しました。

まいばん、いたずらを　しに　きた　きつねは、ぼうさんの　けいりゃくで、つかまって　しまいました。

きつねの　しくじり

けれど、いったい、どう　やって　たたくか、しってるかい。」
「うん。まず、むこうむきに　なってね、あとあしで　たって、せなかを　とに　よりかからせて、しっぽで　たた

ぼうさんたちは、おきゃくさんだと　おもって、
「はい、いま　あけます。まってて　ください。」
そう　いって、どまに　おりて、とを　あけました。
でも、だれも　いません。もりの　ほうで、うおーと、おおか
みの　こえが　するだけです。
そんな　ことが、いくばんも　つづきました。
わかい　ぼうさんたちは　くやしがりました。
「きつねに　ちがいないね。こんど　きたら、ひどい　めに　あ
わせて　やろうよ。」
「それが　いい。きつねは、しっぽで、とを　たたくって　いう

とん　とん、
あけとくれ。」
　と、はじめました。ゆうべ
の　としうえの　ぼうさんは、
どまへ　おりて、
「あけるもんか、あけるもんか。あけて
ことが　あったって、あけないぞ。」
　と、どなりながら、いきなり　がらっと、とを　あけました。

くんだそうだ。」

「よし。そんなら　うまい　かんがえが　ある。」

としうえの　ぼうさんは、にこにこ　うなずきました。

二

あくる　ばんに　なる

と、また、

「とん　とん、あけとくれ。

きつねは、とに　よりかかって　いたから　たまりません。あおむけに、どたんと　どまに　ころがりこみました。

それっと、とを　しめきって、みんなで　つかまえようと　おいかけました。

けれども、おおきな　ふるぎつねでしたから、うまく　にげて、どこへ　いったか、わからなく　なりました。

ほんどうの　ほうへ　さがしに　いった　ひとたちは、あっと、おどろきました。とうとい　かんのんさまが、ふたり　すわっているでは　ありませんか。

おてらの　この　かんのんさまは、むかしから　ひとりで　す

ちが　にこっと　なさるか、よく　みて　いて　おくれ。」
そう　いって、一つずつ、おちゃを　そなえました。
一どめに　あげた　かんのんさまは、すまして　いました。
二どめに　あげた　かんのんさまは、にこっと　しました。
「それっ、こっちが、ばけかんのんだ。」
と、みんな　一どに　とびかかって、わけなく　つかまえて
しばって　しまいました。
「かねで　つくった　ほんとの　かんのんさまが、わらう　はず
は　ないじゃ　ないか。ばかな　きつねだなあ。」
みんな　おおわらい　しました。

わって　いらっしゃるのです。

どっちかが、きつねが　ばけた　かんのんさまです。けれども、どんなに　よく　しらべて　みても、どっちも　ほんとに　みえます。

みんな、こまって　かおを　みあわせて　いました。

その　とき、ちえの　ある　わかい　ぼうさんが、二つの　おちゃわんに　おちゃを　ついで、もって　きました。

「ねえ、きみたちも　しってるように、うちの　かんのんさまは、おちゃが　だいすきで、おちゃを　もって　きて　おそなえ　すると、いつも　にこっと、わらって　くださるね。だから、どっ

も、どう　する　ことも　できないので、
「うるさい、うるさい。
こまる、こまる。」
そう　いいながら、くらして　いました。
ある　ひの　ことです。
おじいさんは、

こぶとり じいさん

一

むかし、ある ところに、こぶの ある おじいさんが いました。

みぎの ほおに、ぽっこりと、おおきな こぶが できて いるのです。

じゃまで、うるさくて、どんなに こまるか わかりません。で

かりが　して、かみなりは　ごろごろ　なりどおしでした。かぜも、ごうごうと　ふきあれました。
よるに　なって、やっと　しずまりました。
つきが　あかるく　てりだしました。
「ああ、よかった、よかった。さあ、はやく　かえろう。」
と、おじいさんが、あなから　でた　ときです。むこうから、がやがや、こえが　して、おおぜい、ひとが　やって　きました。
「はてな、いまごろ　おかしいな。」
つきの　ひかりに　すかして　みて、おじいさんは、あっと、びっくりぎょうてん　して、あわてて、あなの　なかへ　ころが

とおい　やまへ、しばかりに　いきました。ゆうがたに　なった
ので、かえろうと　したくを　して　いると、きゅうに　ひどい
ゆうだちが　やって　きました。
はやく　どこかへ　はいろうと、あたりを　みまわすと、すぐ
そばに、おおきな　きが　たって　いて、ねもとが　ほらあなに
なって　いました。
おじいさんは、そこへ　とびこみました。
「ありがたい　ことだ。これで　ぬれずに　すむわい。はやく
やめば　いいがなあ。」
ところが、あめは　ひどく　なるばかりです。すごい　いなび

かくれて　いる　きの　まえ
は、ひろばに　なって　いました。
おにどもは、そこへ　くると、ひろばの　まんなかに、ひを
もしはじめました。ひの　まわりに、ぐるりと　すわって、おさ

りこみました。
おにです。二ほんの　つのが　にょきんと　でた、あかおに、
あおおに。おそろしい　おにばかりです。
ちょうど、おじいさんが

こんどは、おにたちが、びっくり　しました。
「なんだ、なんだ。にんげんの　おじいさんじゃ　ないか。」
「うまいなあ、おじいさん。」
「すてきだぞ、おじいさん。」
みんなは　よろこんで、わあわあ　てを　たたきました。おじいさんは、てを　ふったり、あしを　あげたり、むちゅうに　なって　おどりました。
おにの　たいしょうは、すっかり　かんしん　しました。
「こんな　じょうずな　おどりは、はじめて　みた。じいさんや、あしたの　ばんも、ぜひ　きて　おくれ。」

けを　のんだり、ごちそうを　たべたり、おおさわぎです。

その　うちに、ふえや　たいこを　ならして、おどりを　おどりました。うたも　うたいました。

おにの　くせに、なかなか　じょうずです。

おじいさんは、うたや　おどりが　だいすきでした。むらの　ぼんおどりでは、いつも　一（いっ）とうしょうを　とる　ほどです。

おじいさんは、じっと　しては　いられません。つい　ふらふらと、あなから　でて　いきました。

いきなり、とくいの　いい　こえで　うたを　うたいながら、なかまに　はいって　おどりだしました。

ものを、とって　お
こう。ほっぺたに
つけて　おくらいだ
から、よっぽど
だいじな
ものに
ちがい
ない。

「うん。きても　いい。」
「きっと　くるかい。どうも　へんじが　あやふやだな。」
たいしょうが　そう　いうと、ひとりの　おにが、
「それじゃあ、この　おじいさんの、だいじな
ものを　とりあげて、あずかって
おきましょう。そう　すれば、
こまるから、きっと　あしたも
きますよ。」
「そうだな。うん、その　ほっ
ぺたに　ふくらんで　いる

二

うちでは、おばあさんが　しんぱい　して、ねないで　まって
いました。
「あっ、おじいさん。こぶは、こ、こぶ。」
おばあさんは、くちも　きけない　ほど、びっくり　しました。
おじいさんは、にこにこ　しながら、わけを　はなしました。
「なんて　まあ、うんの　いい　ことだったろうねえ。」
ふたりは　おおよろこびに　よろこびました。
このはなしを、となりの　おじいさんが　ききました。

これを　あずかって　おくよ。」
そう　いったかと　おもうと、おにの　たいしょうは、いきなり　こぶを　つかんで　ひっぱりました。
こぶは、ぽんと　とれました。
おじいさんが　なでて　みると、ほおは、すべすべと、すべっこく　なって　います。
「やれ　やれ、だいじな　ものを、とられちゃったな。では、また　あした　くるよ。」
そう　いって、おじいさんは、どんどん　うちへ　かえって　いきました。

いのになあ。」
おにの　たいしょうの　こえが　しました。
かくれて　いた　おじいさんは、さあ、この　ときだと、でて
いきました。
「はい、こんばんは。ゆうべの　じじいで　ございます。おやく
そくの　とおり　まいりました。」
「やあ、よく　きたな。みんな　どけ　どけ。じいさんに　おど
らせろ。」
おにの　たいしょうは　おおよろこびです。
ところが、この　おじいさんは　ぶきようで、いままで　いっ

この　おじいさんは、ひだりの　ほおに、おおきな　こぶが
できて　いて、とても　こまって　いたのです。
すぐに、となりへ　いって、たのみました。
「わたしも、こぶを　とって　もらいたいよ。どうか　みちを
おしえて　おくれ。」
となりの　こぶじいさんは、くわしく　みちを　おそわると、
いそいで　いって、きの　あなへ　はいって　いました。
よなかに　なると、おにたちが　やって　きました。また、う
たったり　おどったり　はじめました。
「ゆうべの　じいさんは、まだ　こないな。はやく　くれば　い

ぺんも　おどった　ことなんか　なかったのです。

　ですから、おどるには　おどっても、おはやしの　ふえにもたいこにも、すこしも　あいません。とんちんかんな　おどりです。

　にぎりこぶしを　つきだしたり、あしで　けっとばして　みたり、けんかの　まねでも　して　いるみたいでした。

　おにたちは、みんな　あきれて　しまいました。たいしょうはおこりだして、

「そんな　おどりは　みたく　ない。はやく　かえれ　かえれ。あずかった　ものも　もってけやい。」

けんか

一

むかし、ひどく　びんぼうな　ひとが　いました。

ある　ひ、みちを　あるいて　いると、おなじくらい　びんぼうな、ともだちに　あいました。

ふたりは、いっしょに　あるきだしました。

「なあ、ちび。」

ぽんと、ゆうべの　こぶを　なげつけました。
こぶは、みぎの　ほおに、ぺたっと　ついて　しまいました。
ひっぱっても、とれません。
おじいさんは、みぎと　ひだりの　こぶを　おさえながら、しおしおと、やまを　おりて　いきました。

とくを　して、ともだちに　わけ
ない　なんて、そんな　よく
の　ふかい　やつは、
のらねこか　のらい
ぬと　おんなじだ。」

「なんだい、でか。」
　この　ふたりは、ひとりが　ちいさくて、ひとりが　おおきいので、いつも、こう　よんで　いるのです。
「ふたりで　こう　して　あるいて　いる　ときに、おれが　たくさんの　おかねを　ひろったら、どう　したもんかな。」
「そりゃあ、はんぶんは、おれに　よこすに　きまって　いるさ。」
「そんな　ことは　ないよ。おれが　ひろったら、おれの　もんだ。わけてなんか　やらんぞ。」
　ちびは、おこりました。
「おまえと　おれとは、ともだちじゃ　ないか。じぶんひとりが

二

そこへ、りっぱな　おじいさんが　とおりかかりました。おじいさんは　おどろいて、
「これこれ、あぶない。およし、およし。」
なかに　はいって、やっと　とめました。
「いったい、どう　いう　わけで、こんな　おおげんかを　はじめたんだい。」
おじいさんに　きかれると、ちびは、くちを　とんがらせて、
「わたしたちは　しんゆうなんです。それだのに、この　でか

でかは、まっかに　なって　おこりだしました。

「よくも、おれの　ことを、のらねこだの　のらいぬだのと　いったな。もう　一ど　いって　みろ。しょうち　しないから。」

「いえと　いうなら、いって　やる。よく　きいて　おれ。のらねこ、のらいぬ、のらでか。」

「なにっ。」

ぴしゃっと、でかは　ひっぱたきました。

ちびも、ぴしゃっと　ひっぱたきました。

ふたりは　とっくみあいました。おおげんかです。どろが、ぱっぱと　とびました。

いうんです。」
　すると、でかは、かたを　いからせて、
「こいつは、ともだちのくせに、わたしの　ことを、のらねこだの、のらいぬだの、のらでかだのって　いいました。」
「ふうん。どっちも　わるいな。ところで、おまえさんは　いくら　おかねを　ひろったんだい。みせて　ごらん。」
「えっ。」
　でかは、めを　ぱちくり　しながら、しばらく　かんがえていましたが、いきなり、
「あっ、なんだ、まだでした。まだ　ひろわなかったんです。な

が、おかねを　たくさん
ひろっても　くれないって

つまらぬ　ことで、けんかに　なった　ことが　わかった　ふたりは、おかしくて　わらいだしました。

あ、ちび。」
「あっ、そうだ。ひろったらと　いうんだったなあ、でか。」
おじいさんは　あっけに　とられて、
「ひろわない　うちに、けんかだけ　さきに　やっちゃったのかい。」
でかは、あたまを　かきました。ちびも、あたまを　かきました。そして、おたがいに　ほこりだらけの　ひたいに　できた、おおきな　こぶを　ながめながら、あっ、は、は、はと　わらいだしました。
おじいさんも　いっしょに、あっは、は、はと　わらいました。

きんたろう

一

むかし、あしがらやまの　やまおくに、きんたろうと　いう
こどもが、おかあさんと　いっしょに、くらして　いました。
きんたろうは　あかちゃんの　ときから、とても　ちからもち
でした。
五つ　六つごろに　なると、どれほど　ちからが　あるのか

きんたろうは、くまを　いっぺんに　なげ　とばしました。もりの　どうぶつたちも　おどろいています。

きんたろうは　さけんで、くま
と　とっくんだと　おもうと、
どしんと、なげとばしました。
「あいた、た、た、た。」
くまは　べそを
かきながら、
やっと　おき
あがりました。
　しかや、うさ
ぎや、さるが　で

わからない　ほどに　なりました。
やまの　なかなので、おともだちなんぞ、ひとりも　いません。
しかたが　ないので、おかあさんから、よく　きれる　まさかりを　いただいて、もりの　なかの　ふとい　きを、ごんごんきりたおして　あそんで　いました。
ある　ひ、また、きを　きって　いると、
「だれだ。おれの　もりへ　きて　いたずらを　するのは。」
と、おおきな　くまが、いきなり　とびかかって　きました。
「なまいき　いうな。もりは、だれの　もんでも　ないぞ。」

みんな　なかよく　くらすんだよ。いいかい。」

はい、はいと、みんな　おおよろこびでした。

この　ちいさな　たいしょうは、いつも　はだかです。はだかに　はらがけを　かけて、つよそうな　あかい　かおを　して、くまたちを　つれて、まいにち、もりを　あるきまわって　いました。

二

ある　ひ、きんたろうは、おかあさんに　おむすびを　たくさん　つくって　いただきました。

て　きて、みんな、おどろいて　みて　いました。
おおきな　くまは、ちいさく　なって、きんたろうの　まえに
おじぎを　しました。
「なんて　つよい　ぼっちゃんでしょう。あなたは　どなたです
か。」
「ぼくは　きんたろうだ。」
「これからは、わたしたちの　たいしょうに　なって　ください。」
くまが　そう　いうと、しかや、うさぎや、さるたちも、いっ
しょに　なって　たのみました。
「よし。その　かわり、ぼくの　いう　ことを　よく　きいて、

いいました。
「ここで、すもうを　しようじゃないか。かった　ものには　ほうびを　あげる。ほら、こんな　おおきな　おむすびだ。」
「わっ、すごいぞ。」
さるなんか、まっかに　なって　はりきりました。
一ばん　さきに、さると　うさぎが　とりくみました。
ぎょうじの　しかは、あっち　こっち　とびまわって、

きょうは、みんなと　えんそくに　いくのです。
おむすびを　もって、まさかりを　かついで、みはらしの　いい　おかの　うえに　いきました。きんたろうは

「はっけよいや、のこった、のこった。」
と、どひょうを　はねまわりました。
あっと　いう　まに、くまは、しかを　なげとばしました。
くまは　おむすびを　もらって、めを　ほそく　して、たべて
います。きんたろうは、
「しかと　うさぎは、ぎょうじを　したから、ほうびを　やらな
くては　いけない。」
そう　いって、おむすびを　やりました。
さるや　くまの　たべるのを、うらやましそうに　みて　いた
しかと　うさぎは、うれしそうに　てを　だしました。

「みあって、みあって。はっけよいや、のこった、のこった。」

と、いっしょうけんめいです。

しばらく　すると、さるは　うさぎの　みみを　つかみました。うさぎは　くびを　ふって、さるの　てを　ぬこうと　しましたが、とうとう　なげだされて　しまいました。

みんな、ぱちぱち　てを　たたきました。

きんたろうから　おむすびを　もらうと、さるは、きゃっきゃと　よろこんで、むしゃむしゃ　たべはじめました。

つぎは、しかと　くまで、ぎょうじは　うさぎです。

うさぎの　ぎょうじは　きんきんごえで、

どこを　ながめても、
はしが　ありません。
「こまりましたね、き
んたろうさん。もとの
みちに　かえりましょ
うか。」
「まてまて。ぼくが
はしを　かけて　やる。」
「えっ、そんな　ことが
できますか。」

おにごっこや　かくれんぼも
しました。

三

かえりは、きた　ときと
べつの　みちに　しました。
ずんずん　いくと、おおきな
たにがわへ　でました。
みずは、すごい　いきおい
で　ながれて　います。

ぱい、たにがわの　ほうへ　おしました。

ぐい、ぐい、ぐいと、三べん　おすと、めりめりめりっと　おとが　して、きは、かわの　むこうがわに　たおれかかりました。

りっぱな　はしに　なりました。

「さあ、みんな　ついて　おいで。」

きんたろうは、さっさと　わたって　いきました。

「なんて　すごい　ちからだろう。」

みんな　おどろきながら、ついて　いきました。

さっきから、ひとりの　きこりが、きの　かげで、そっと　みて　いました。

「だまって　みて
いろよ。」
　たにがわ
の　きしに、
ふたかかえも
ある、ふとい　おお
きな　きが　はえて
いました。
　きんたろうは、その　きに
りょうてを　かけて、ちからいっ

て、らいこうの　けらいに　なる　ことに　なりました。
くまや　しかたちも　よろこんで、きんたろうが　みやこへ　いく　ひには、とちゅうまで　みおくりに　いって、てを　ふって　わかれました。
きんたろうは　おとなに　なると、さかたの　きんときと　いう、それは　それは、りっぱな、つよい　さむらいに　なりました。

これは、ほんとの　きこりでは　ありません。みなもとの　らいこうと　いう、えらい　たいしょうに　たのまれて、けらいに　するような、つよい　こどもを　さがしに、ほうぼうを　まわりあるいて　いる　さむらいでした。

「こんな　つよい　こどもは、みた　ことが　ない。この　こを　つれて　いきたいな。」

その　ひとは、きんたろうの　あとを　つけて、うちまで　いきました。

そして、おかあさんに　わけを　はなしました。おかあさんは　おおよろこび。きんたろうも　おおよろこびで、みやこへ　いっ

「あんまり　みじかい　なまえは、うん
が　わるいそうだよ。ながい　なまえ
を　つけると、うんが
よくって、ながいきを

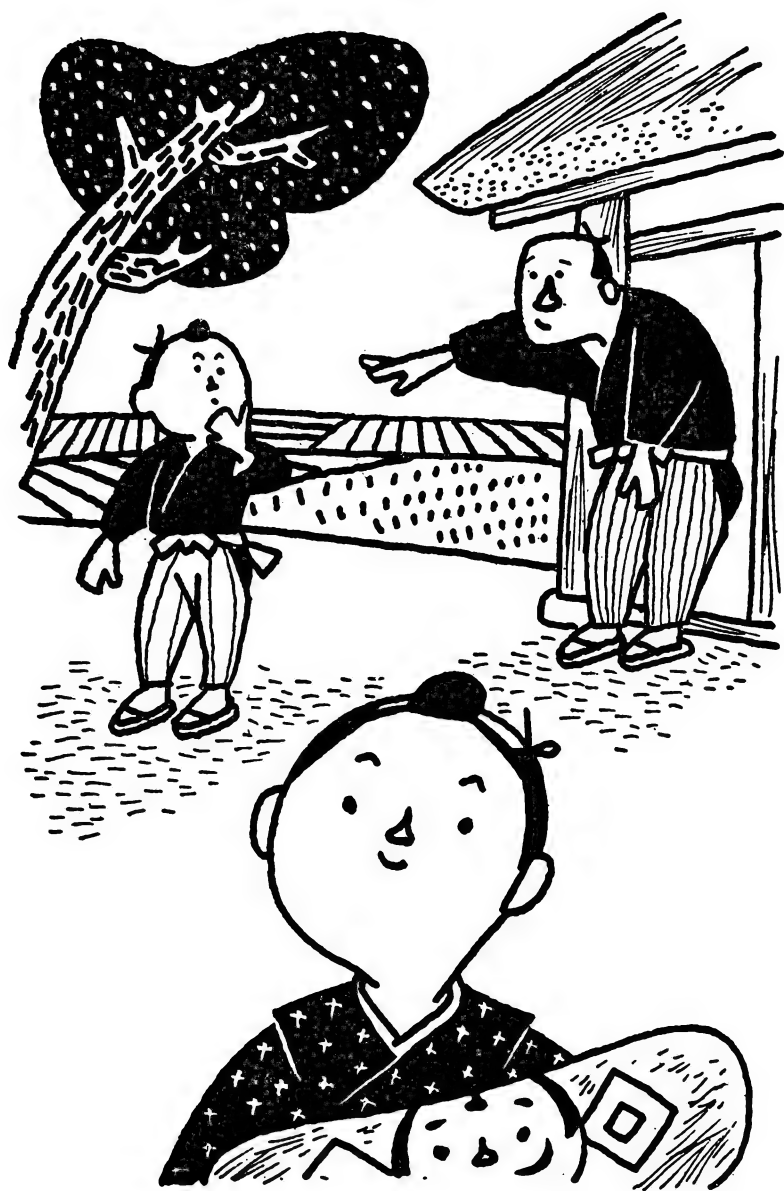
ながい　なまえ

一

むかし、ある　ひとが、こどもの
なまえに、みじかい　ほうが　よびい
いと　おもって、『ちょん』と　いう

なまえを　つけました。
きんじょの　ひとたちが、

まだ　さかぬ。はなより　だんごで　おちゃ　あがれ。おちゃが
すんだら、たばこに　しょうすけ』
なんと　きみょうな　なまえでしょう。
にいさんと　おとうとは、おおきく　なると、よく　けんかを
しました。
まけそうに　なると、おとうとは、すばやく　とおくへ　にげ
て　いって、
「ちょん　きな、ちょん　きな。ちょちょんの　ちょん。あかん
べ。」
と　やります。ちょんにいさんは　くやしがって、おこって

するそうだ。」
と、いいました。
その ひとは、それを きくと おどろいて、つぎに うまれた こどもには、うんと ながい なまえを つけました。
こう いう なまえです。
「ちょうにん ちょうにん、ちょうじゅうろう。まんまる にゅうどう、ひら にゅうどう。せいたか にゅうどう、へいがのこ。いっちょうぎりの ちょうぎりの、ちょうの ちょうの ちょうぎりの、あの やまの、この やまの、その また むこうの あの やま こえて、この やま こえて、さくらは さいたか

やろうと、おとうとの　なを　よびます。

「こらっ、にげるな。この　ちょうにん、ちょうじゅうろう。まんまる　にゅうどう、ひら　にゅうどう。せいたかにゅうどう、へいがのこ。いっちょうぎりの　ちょうぎりの。」

このくらいまで　いうと、おとうとは、もう　うちへ　かえって、おちゃを　のんで、のんびりと　おやつを　たべて　いるしまつです。

ちょんさんの　おとうさんも、ちょんさんの　なまえが　よびいい　ものですから、ようさえ　あれば　すぐに、

「ちょん、ほうきを　もって　きな。ちょん、まちへ　つかいに

「いいなあ、おとうとは。」
と、にいさんは　うらやましがりました。

二

ちょんさんは、ある　ひ、おともだちと　うらで　あそんで
いると、どう　した　ことか、いどへ　おちました。
ともだちは　びっくり　して、すぐに　はしって　いって、お
とうさんに　しらせました。
「ちょんさんが　いどに　おちたよっ。」
それっと、おとうさんは　とびだして、はしごを　おろして、

いって　こい。」

と、なんにでも、ちょんさんを　つかいます。

おとうとと　いっしょに、いたずらを　して　いても、

「これ、ちょん。なんだ、その　いたずらは。」

と、すぐに、ちょんさんが　しかられます。

おとうさんは、おとうとの　ほうも、しかろうと　おもって、

ちょうにん　ちょうにん、ちょうじゅうろうと　いいはじめます

が、あの　やま　こえて、この　やま　こえてと、その　あたり

まで　いうと、もう　めんどうくさく　なって、おこるのを　や

めて　しまいます。

おれなんか　だいじょうぶさ。にいさんは、みじかい　なまえだから、おっこちたんだ。」

そう　いって、わざと　いどの　まわりで、あそんで　いました。

あっと　いう　まに、　たすける　ことが　できました。
それから　二、三にち　すると、こどもたちは、　また　うらで
あそびはじめました。
けれども、いどは、　もう　こり
ごりです。みんな、そば
へも　よりません。
ちょんさんの　お
とうとだけは、
「ながい　なまえは、
うんが　いいんだから、

ようすけさんが、いどに　おちましたよ。」

「えっ、そりゃ　たいへんだ。」

おとうさんも　おかあさんも、あおく　なって　かけだしました。

あんまり　てまが　とれたので、いまにも　しにそうに　なって　いました。

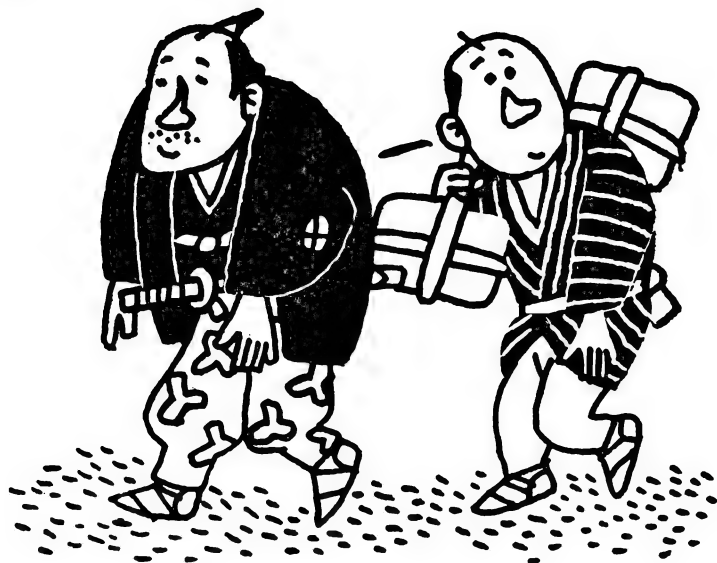
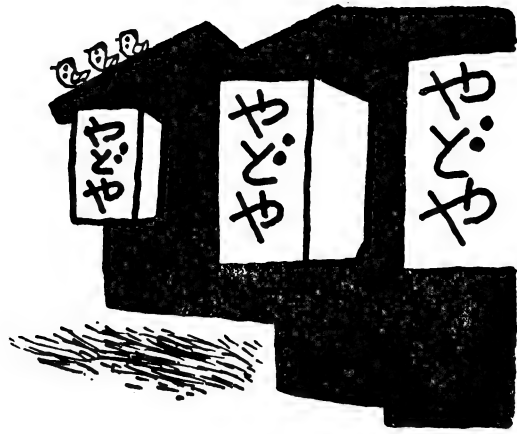
でも、やっと　たすかりましたが、ながい　なまえも、かんがえものですね。

ところが、 あしが すべって、 どぶうんと、 いどに おちて しまいました。

みんなは、 びっくり して、 はしって しらせに いきました。

「たいへんです、 おじさん。 いまね、 ちょうにん ちょうにん、 ちょうじゅうろう。 まんまる にゅうどう、 ひら にゅうどう。 せいたか にゅうどう、 へいがのこ。 いっちょうぎりの ちょうぎりの、 ちょうの ちょうの ちょうぎりの、 あの やまの、 この やまの、 その また むこうの あの やま こえて、 この やま こえて、 さくらは さいたか まだ さかぬ。 はなより だんごで おちゃ あがれ。 おちゃが すんだら、 たばこに し

みやこへ　ついて、やどや
で　ひとやすみ　すると、
まちの　けんぶつに　でか
けました。

でかける　とき、しゅじ
んは　いいました。
「この　へんは、あっち
にも　こっちにも、おなじ
ような　やどやが、たくさ
ん　ならんで　いるなあ。かえり

やねの めじるし

むかし、いなかの　おかねもちの
ひとが、おともを　つれて、みやこ
けんぶつに、でかけました。
この　おともの　おとこは、すこし
ちからもちなので、にもつもちには、
まが　ぬけて　いますが、
一ばん　いいのです。

やどや
やどや

に　じぶんの　やどやが　わからなく　なったら、それこそ　たいへんだ。」
「なにか、めじるしを　して　おけば　いいですね。」
「ほほう、なかなか　よく　きが　つくな。じゃあ、おまえにたのんで　おくよ。しっかり　やって　おくれ。」
「はい　はい、ごあんしん　ください。」
　ほうぼう　けんぶつを　して、ゆうがた、やどやの　ちかくまで　くると、おともの　おとこは、きょろきょろ　しながら、
「さあ、たいへんだ。どれが、あの　やどやだったか　わからなく　なったぞ。」

「どろで　こしらえた　すずめか。」
「いえ、ちゅうちゅう　いって　いました。」
「いきてる　すずめは　とぶもんだ。」
「ははあ、そうで　ありましたか。」
おとこは、がっかり　して　いました。

日本のおとぎ話　一年生（おわり）

あおく　なって　います。
しゅじんも　びっくり　して、
「だって、おまえは　ちゃんと、めじるしを　して　おいたんだろう。」
「はい。ちゃんと　して　おいたんですが、どう　した　ことか、それが　なくなって　おります。」
「なにを　めじるしに　したんだ。」
「けさ、でかける　ときに、やねの　てっぺんに　すずめが　三ば、とまって　いました。それを　めじるしに　して　おいたんです。」

のすぐれたものは、なん百年たった今日でも、なお、つきることのない賞讃をうけて、現代の人びとにむかえられていることは、ご承知のとおりです。

わたくしは、この『一年生のおとぎばなし』を編むにあたりまして、出所は何とかぎらず、広い範囲から、自由に取捨選択をいたしました。そして、むかしからある名高い話で、一年生くらいの子どもなら誰でもぜひ知っていてほしいと思うもの、しかも、特におもしろい話をよりだしてのせました。

このしごとで、数かずの話を読んでみますと、その中のいくつかは、幼かったころに母のひざできいたなつかしい物語でありました。また、母になったわたくしが、幼いわが子のために、夜ごとまくらもとで話してやったものも、たくさんありました。

このように『おとぎばなし』は、母なり、父なり、祖父母なりによって、なん十年、なん百年、あるいは千年以上も次から次へと話しつがれてきたのです。

次に各篇の解説をかんたんに記しましょう。

☆けちんぼと　けちんぼ　むかしからよくある、もの惜しみをする『和尚さんと小ぼうず』の話などと一連の笑話です。

先生や、ご両親の皆さまへ

――解説と読書指導の手引――

いまの社会では、『おとぎばなし』というと、幼児への話のように考えられていますが、むかしは、子どもおとなにかかわらず、夜よるのつれづれに、心をなぐさめるために話した物語のいっさいを、お伽話といっていました。

そのことは、大名の話相手をする役人たちを、『お伽衆』という役名でよび、若殿の話相手の年少のものは、『お伽小姓』の名でよばれていたことでもわかります。

すべて子どもたちのお伽の場合は、うらしま太郎、花咲じいさん、桃太郎といった、むかしばなしが語られ、おとなの場合には、仏教説話や、戦記もの、愛情のものめごとばなしなどが語られていたようです。

なお、そのほかに庶民の間では、自分たちの日常生活の中から取材して、それに温かい心を通わせてつくった物語がありました。つまり民話といわれるものです。民話の中

☆あかい　おわん　するなといわれた事をしたとか、見るなといわれたものを見たとか、そういう類話は数かぎりなくあります。その多くが禁をおかして不幸におちいるのですが、最後までいいつけを守って、大きな幸運を得る話もたくさんあります。約束は守らなければならないとか、自分の欲にまけるなとかいう教訓話の一つです。

☆ねずみの　すもう　まずしいもの同士がいたわりあって強いものに当っていく、素朴なユーモアを含んだほほえましい話です。『めでたしめでたし話』の一つです。

☆かちかちやま　日本五大むかし話の一つ。赤本に『うさぎのてがら』としてのせられ、江戸時代の初期から流行していました。日本特有の『敵討話』です。ずるいたぬきが、あとへいくに従って、まぬけのおひとよしに変化し、また、おばあさんを殺して、ばばあ汁をこしらえるという残虐性も持たせてあります。そういう性格は、外国童話のくまや大男によくある性格なので、この『かちかちやま』は、それらに影響されてできた作品であろうとの説もあります。この本では、残虐な場面だけは適当に書き改めました。

☆あまい　かき　しぶい　かき　『甲斐昔話集』の中にある話です。どの家にもかならず二、三本の柿の木がある古い村に、ただ一本の柿の木も持たない、貧しい家の、

☆ふじづるの　こぶ　むかしの人が、純粋な心で、えらい和尚さまなどを一途に信じたころには、このような話によく似たこともあったことでしょう。民衆の中で、生まれてそだった話だということが容易に想像されます。

☆したきり　すずめ　日本五大むかし話の一つです。『宇治拾遺物語』にある『腰折雀』が原話で、『動物報恩話』と『ものうらやみ話』の二つの型がいっしょになったものです。おじいさんがつえをついて、夕方のさむい風にふかれながら雀をさがしてあるく、あの純粋な愛情は、子どもの情操を養ううえに大きく役立つものと思います。

☆はまぐりひめ　『お伽草子』にある話です。『お伽草子』は話の大半が僧侶によって書かれたものですから、この話も、親孝行な男のために、観世音菩薩が、はまぐり姫をつかわして財宝を与えてやるという、仏教説話の一つであることは明らかです。

☆さるかに　かっせん　これも五大むかし話の一つです。『敵討話』ですが、仲間が力をあわせて、弱いものを助けてやるという友愛をも説いたものと見られます。ただ、グリムのコルベスの鬼退治の話——にわとり、かも、ねこ、たまご、ピン、石うすなどがいっしょになって、鬼退治にいく話——によく似ているので、あるいは、西洋童話をもとにして創作されたものではないかと見るむきもあります。

国ぐにのものは、相手が鬼でなく小人になっていて、教訓も、もの羨みをするなというのではなくて、むやみと欲ばるとひどい目にあうぞという教訓になっています。

☆けんか　一つの仮定がこうじて、いつか本当のような気がしてくる。——この話は、だんだん話を大げさにして、けんかにまで発展させる人間の心理のおもしろいところをつかんだ話だと思います。

☆きんたろう　源頼光の四天王のひとり、坂田公時の半伝説的童話です。山うばにそだてられ、ものすごい力持ちのために出世をした子どもの話で、金太郎は、いつからか、わが子の健康と将来を祝う親心に結びついて、五月の節句のかざりものにつかわれることにもなりました。山うばとよばれるものは、ごく古い年代では、鬼女の仲間に入れられていたおそろしい女でした。けれども、その後、次第におそろしさは強調されなくなって、ただ、からだがたいへんに大きくて、通力があり、非常な力持ちの女ということになってきました。金太郎をそだてた山うばなどは、それでありましょう。

☆ながい　なまえ　早口話とか、くいちがい話とかいう笑話の種類にはいるもので、日本のことばの調子のおもしろさを主としたものです。落語などでも、ながい名前の話はよく語られていますが、たいてい、『寿限無』という名前の方を話します。

かしこい母親から生まれた話と想像されます。柿が木の上から歌をうたいながらおりてきて、子どものなわをといたり、ふところにはいったりするところなどは、母親と思われる作者の、貧しい子どもに対する深い愛が感じられて、胸をうたれます。

☆ももたろう　日本五大むかし話の随一。桃から生まれた桃太郎少年が、冒険をもとめて知らぬ他国へ出かけていき、たくさんのおみやげをもって、勇ましく家へ帰るというこの話は、例外なく子どもを喜ばせます。「日本一」という旗を立てていきますので、外国というものをはっきり意識するようになってからの、比較的近世の話ではないかといわれています。しかし、内容は純然たる日本の話です。

☆きつねの　しくじり　民話には、きつねやたぬきの化けた話、化かされた話が非常にたくさんあります。そして、たいていがユーモラスな笑話になっています。むかしは、自分自身がきつねに化かされたとか、たぬきが化けたのを見たとかいう人が多かったので、このようないかにも好ましい素朴さをもった話ができたのでしょう。

☆こぶとり　じいさん　ひとのしあわせを羨んで失敗する教訓話です。『宇治拾遺物語』にある話ですが、中国、韓国に、もっと古くから、殆んど同じ話がありますし、ドイツのグリム童話にも、アイルランドのイエーツ童話の中にもあります。西洋の

N.D.C 913
徳永寿美子 編著
日本のおとぎ話　一年生
偕成社　1981年
218p.　22cm　(学年別・幼年文庫　一年　6)

学年別・幼年文庫 6
日本のおとぎ話 一年生

1956年12月　1刷
1981年8月　51刷

著　者　徳永寿美子(とくながすみこ)
発行者　今村広
本文印刷　若葉印刷有限会社
多色印刷　小宮山印刷株式会社

発行所　株式会社　偕成社(かいせいしゃ)
東京都新宿区市ケ谷砂土原町3の5
振替　東京5—1352番

☆落丁本・乱丁本はおとりかえいたします
ISBN4-03-901060-4 printed in Japan.

『ちょうにん』の方が、内容が子どもらしいので、この本ではこちらをとりました。

☆**やねの　めじるし**　ばかむことか、与太郎とか、少したりないものの行動を笑話にしたものは、日本ばかりでなく、中国、韓国、ヨーロッパ諸国にもたくさんあります。これもその一つにはいります。

これらの『おとぎばなし』を読みますと、たとえどんなに貧しくても、善人であることだけを理想にして、素朴に、愛情ふかく、平和を好んで生きていた祖先のすがたがよく感じとられます。

その意味で、ご両親や先生がたは、幼い子どもさんがたに、何よりもまず、祖先を知ることのできる日本の『おとぎばなし』を読ませて、美しい人間の姿をおしえていただきたいと思うのです。そして、ご自身も子どもの心になって、いっしょにもう一度読みかえされたなら、きっと、幼いころのなつかしい夢がよみがえってくると同時に、おとぎばなしの本当の味が、よくおわかりになると思います。

徳永寿美子

(9) グリムどうわ 一年生
(10) 日本れきしの光 一年生
(11) 偉人の話 一年生
(12) 世界名作ものがたり 一年生
(13) たのしい神話とでんせつ 一年生
(14) アラビアン・ナイト 一年生
(15) 理科なぜどうして 一年生
(16) 世界のおとぎ話 一年生
(17) 日本名作ものがたり 一年生
(18) 世界ふしぎめぐり 一年生
(19) 明るい話・正しい人 一年生
(20) 世界れきしの光 一年生

(9) グリムどうわ 二年生
(10) 日本れきしの光 二年生
(11) 偉人の話 二年生
(12) 世界名作ものがたり 二年生
(13) たのしい神話とでんせつ 二年生
(14) アラビアン・ナイト 二年生
(15) 理科なぜどうして 二年生
(16) 世界のおとぎ話 二年生
(17) 日本名作ものがたり 二年生
(18) 世界ふしぎめぐり 二年生
(19) 明るい話・正しい人 二年生
(20) 世界れきしの光 二年生

(9) グリム童話 三年生
(10) 日本れきしの光 三年生
(11) 偉人の話 三年生
(12) 世界名作ものがたり 三年生
(13) たのしい神話とでんせつ 三年生
(14) アラビアン・ナイト 三年生
(15) 理科なぜどうして 三年生
(16) 世界のおとぎ話 三年生
(17) 日本名作ものがたり 三年生
(18) 世界ふしぎめぐり 三年生
(19) 明るい話・正しい人 三年生
(20) 世界れきしの光 三年生

同一書名のものが各三冊に分れていますが、各学年の興味と理解力に応じ、内容はそれぞれ異っています。

小学一・二年生むき

(10) つるの恩がえし　日本民話集　岡本良雄
(11) とよとみひでよし　偉人のものがたり　柴野民三
(12) 大江山のおに　日本民話集　宮脇紀雄
(13) イソップ絵物語　イソップ名作選　徳永寿美子
(14) 一休さん　偉人のものがたり　土家由岐雄
(15) しらゆき姫　グリム名作集　山主敏子
(16) 日本むかしばなし　日本民話集　浜田廣介
(17) そんごくう　呉承恩原作　土家由岐雄
(18) 小公子　バーネット原作　三木澄子
(19) イソップどうわ　イソップ名作選　大木雄二
(20) エジソン　偉人のものがたり　山本藤枝
(21) 子じかものがたり　ローリングス原作　平塚武二
(22) 野口英世　偉人のものがたり　土家由岐雄

(32) フランダースの犬　ウィーダ原作　奈街三郎
(33) きつねのさいばん　ゲーテ原作　佐藤義美
(34) ふしぎなランプ　アラビアン・ナイト　宮脇紀雄
(35) リンカーン　偉人のものがたり　平井芳夫
(36) アルプスの少女　スピリ原作　徳永寿美子
(37) 七ひきの子やぎ　グリム名作集　槇本ナナ子
(38) 日本おとぎばなし　日本民話集　西山敏夫
(39) クオレ絵物語　アミーチス原作　岡本良雄
(40) ワシントン　偉人のものがたり　久保喬
(41) かえるの王さま　グリム名作集　久米穣
(42) にんぎょ姫　アンデルセン名作集　柴野民三
(43) ピーター・パン　バリー原作　筒井敬介
(44) 家なき子　マロー原作　徳永寿美子

A5判
一六〇頁

(54) たから島　スチーブンソン原作　川崎大治
(55) いじんの話　偉人の少年時代　久保喬
(56) くろうま物語　シュウエル原作　柴野民三
(57) 美しい話　偉人の逸話集　大木雄二
(58) しあわせの王子　ワイルド原作　岸なみ
(59) 曽我きょうだい　日本古典　二反長半
(60) せむしの小馬　エルショーフ原作　猪野省三

全国学校図書館協議会選定

なかよし絵文庫 全60巻

絵本から読書への転換期にある子どもにぜひ読ませたい本

やさしい文章にうつくしい色絵とさし絵がいっぱい！ 全巻完結！

(1) 世界民話集 ジャックと豆の木 二反長半
(2) 日本神話選 いなばの白うさぎ 久保喬
(3) 偉人のものがたり みなもとよしつね 大木雄二
(4) アラビアン・ナイト アリババのぼうけん 柴野民三
(5) 日本伝説 あんじゅとずし王 平井芳夫
(6) スイフト原作 ガリバーものがたり 佐藤義美
(7) 偉人のものがたり 二宮金次郎 久保喬
(8) アンデルセン名作集 マッチ売りの少女 小出正吾
(9) アミーチス原作 母をたずねて 田島準子

(23) 世界民話集 世界むかしばなし 神戸淳吉
(24) 偉人のものがたり ナイチンゲール 三木澄子
(25) グリム名作集 グリム絵ものがたり 小出正吾
(26) 偉人のものがたり りょうかんさま 大木雄二
(27) メーテルリンク原作 青い鳥 土家由岐雄
(28) アンデルセン名作集 はくちょうの王子 浜田廣介
(29) ザルテン原作 バンビものがたり 奈街三郎
(30) アンデルセン名作集 アンデルセン絵童話 山主敏子
(31) 日本民話集 かぐや姫 土家由岐雄

(45) 偉人のものがたり キュリー夫人 岸なみ
(46) コロディ原作 ピノキオ 関英雄
(47) トウェーン原作 こじき王子 川崎大治
(48) ペロー名作集 シンデレラ姫 三木澄子
(49) キャロル原作 ふしぎの国のアリス 久米穣
(50) デフォー原作 ロビンソン物語 柴野民三
(51) 日本民話集 彦一とんち話 土家由岐雄
(52) バーネット原作 小公女 徳永寿美子
(53) 日本歴史逸話集 れきしの光 宮脇紀雄